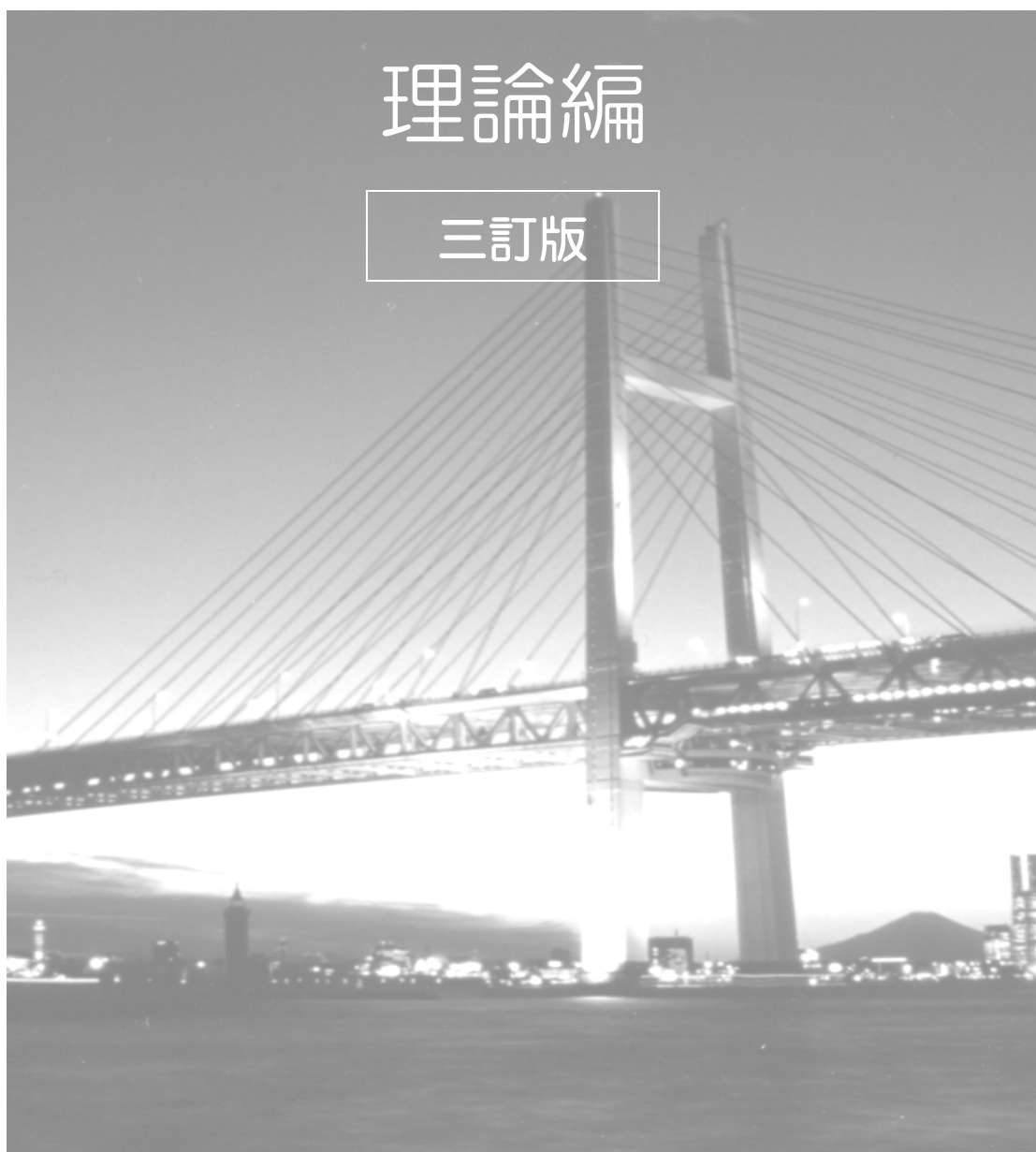




子どもの社会的スキル横浜プログラム

理論編

三訂版



平成24年5月

目 次

1 「子どもの社会的スキル横浜プログラム」の背景と構造……………	1
2 「子どもの社会的スキル横浜プログラム」の特徴……………	5
3 プログラム実施上の配慮事項……………	3
4 効果的なふり返し……………	10
5 横浜プログラムのフォーマットの読み方……………	12
6 プログラム実施計画の作成……………	14
7 Y-P アセスメントとは……………	26
8 Y-P アセスメント支援検討会の意義……………	31

1 「子どもの社会的スキル横浜プログラム」の背景と構造

友達とのけんか等の誰もが経験する問題から、転校や死などによる友達の喪失、離婚による親や家族との離別など、人生の転機となるような危機まで、子どもは様々な課題に直面しながら生きています。しかし、これらの問題は、本来子どもが成長するために、段階に応じて対処し、越えなければならない様々なハードル（課題）と考えることもできます。子どもは新しい課題に直面すると、従来のやり方を用いたり、周囲の支援を受けたりしてそれを解決し、乗り越えたことを新しい経験として豊かに成長していくものです。

文部科学省は「深刻ないじめは、どの学校にも、どの子にも起こりうる」という見解を発表しています。「いじめ」が深刻化したり、不登校などの大きな問題に発展したりするのは、子ども達に「いじめ」に対処する力、いじめを解決する力がなくなったことを表しています。これは、問題や課題に対して、効果ある対処法を選択し、自分で解決していく能力などの「社会的スキル」が子ども達に身につけていないこと、そして、いじめに歯止めをかけるべき学級集団の力が落ちていることが原因として挙げられます。

となります。泣いたり、「バーバー、マンマン、ブーブー」等の喃語^{なんご}を発したりする乳児に対して、養育者は、その目を見つめながら、その言葉にならない言葉を解釈し意味づけて、乳児の欲求を探し、満たしていきます。これらの原初的なコミュニケーションの過程は、人として無条件に受け入れられるという体験でしょう。

2つ目は、幼児期前期にトイレを我慢したり食事時間などをコントロールしたりする等の「**がまん体験**」を通して獲得される価値です。待ったり我慢したりできるようになったことを養育者によって誉められ認められることで育つもので、意志面の土台づくりとなります。この土台が、自己責任を意識させ自律した生活の基盤となります。

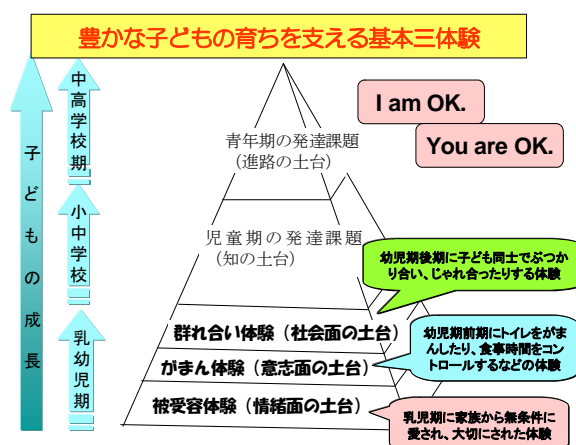
3つ目は、幼児期後期に子ども同士でぶつかり合い、じゃれ合ったりする「**群れ合い体験**」を通して獲得される価値で、社会面の土台づくりとなるものです。子ども達は、その中で人との距離の取り方や関係性を学びます。自ら進んで人とかわり、他者の痛みや思いを感じるなど、相互理解の基盤となります。

本来なら、乳幼児期に獲得されるこれらの土台の上に、児童期の発達課題である「知の土台づく

子ども達の発達課題の積み残し

子どもの人格形成の土台となるのは、乳幼児期から就学前までの基本体験であるといわれています。この時期には、情緒面、意志面、社会面の土台作りに欠かすことができない3つの基本体験によって培われる3つの価値があります。

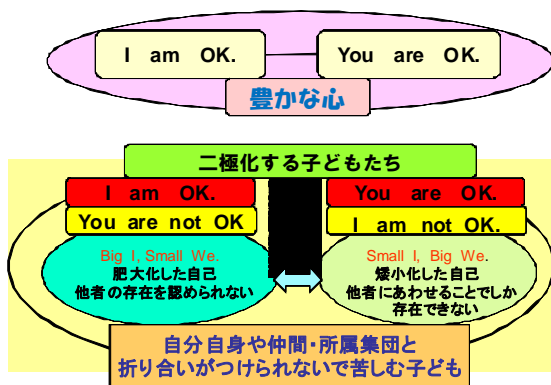
1つ目は、乳児期に家族から無条件に愛されたり、大切にされたりする「**被受容体験**」を通して獲得される価値で、情緒面の土台づくりとなるものです。これが、人との基本的な信頼関係の基盤



り」、青年期の発達課題である「進路の土台づくり」がなされます。しかし、核家族化・少子化、地域コミュニティの希薄化等による人とのかかわりの減少によって、子どもがこれらの力を獲得するのに必要なふれあい体験の機会を十分に得られないまま成長し、これらの発達課題が積み残されてしまっています。

二極化する子ども達

3基本体験の充足されていない子ども達は、人や集団への基本的な信頼関係づくりが不十分なために、自分自身や仲間・所属集団に対して一定の距離が保てず、過大評価と過少評価の間を振り子のように揺れ動きます。一方の極には、他者の存在を認められず、独りよがりな身勝手な考え方や行動をとるいわゆる自己中心的(“Big I, Small We”)な子ども達の姿があります。もう一方の極には、仲間の同調圧力(ピアプレッシャー)に耐え切れず、矮小化した自己概念で周囲に流され、自分の本来の感情を出すことができない(“Small I, Big We”)子ども達の姿があります。これら二極化した子ども達は、自分自身や所属集団との折り合いがつけられず、苦戦する子どもということができるでしょう。



森田洋司氏は、『いじめの四層構造』の中で、いじめで重要な役割を果たすのは「加害者」よりも、

それを見ておもしろがる「観衆」、見て見ぬふりをする「傍観者」の存在であるといいます。「観衆」「傍観者」が否定的な反応を示せば「加害者」はクラスから浮き上がり、逆に「観衆」がおもしろがったり「傍観者」が黙認したりするといじめは助長されていきます。二極化した子ども達は、いじめにおける「加害者」として、あるいは「傍観者」や「観衆」として役割を演じる可能性のある子ども達かもしれません。

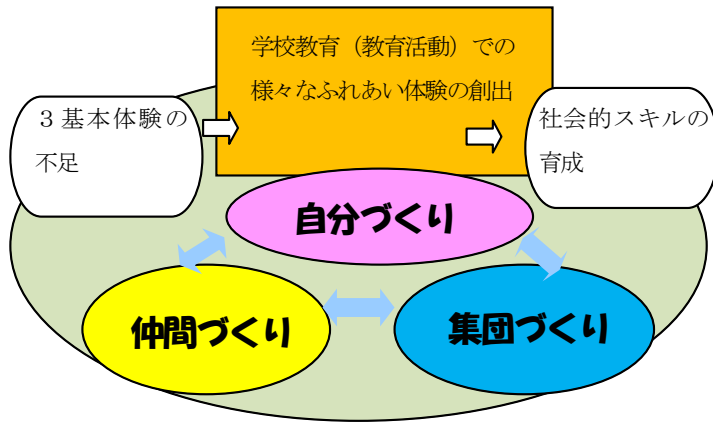
彼らの肥大化した自己 (Big I) や矮小化した自己 (Small I) を緩め、集団 (We) との折り合いをつけることができるようにして、健やかな個人の成長支援と、健全な学級集団の育成を目指して、「子どもの社会的スキル横浜プログラム」は生まれました。(以下「横浜プログラム」と表記)

なお、3基本体験の補充を学校教育で行うことについては、“遅すぎる”との指摘がありますが、児童期・青年期の発達課題である知の土台作りと進路の土台づくりをより効果的なものとするためにも、学校教育での補充は意味があると言えるでしょう。

個を生かす集団指導プログラム

横浜プログラムでは、「3基本体験の不足」を補うため、個人、対人関係、所属集団への「3つのアプローチの視点」から様々な体験が準備されています。個々への成長支援である個人へのアプローチは「自分づくり」、個人間のコミュニケーションと対人関係へのアプローチは「仲間づくり」、所属集団の発展と改善を目的としたアプローチは「集団づくり」として、体験を通した子ども自身の「気づき」や「分かち合い」から、基本スキルを身に付けられるような構成がとられています。

横浜プログラムの特徴は、この「3つのアプローチ」があることにより、「個を生かす」集団指導プログラムとなっていることです。



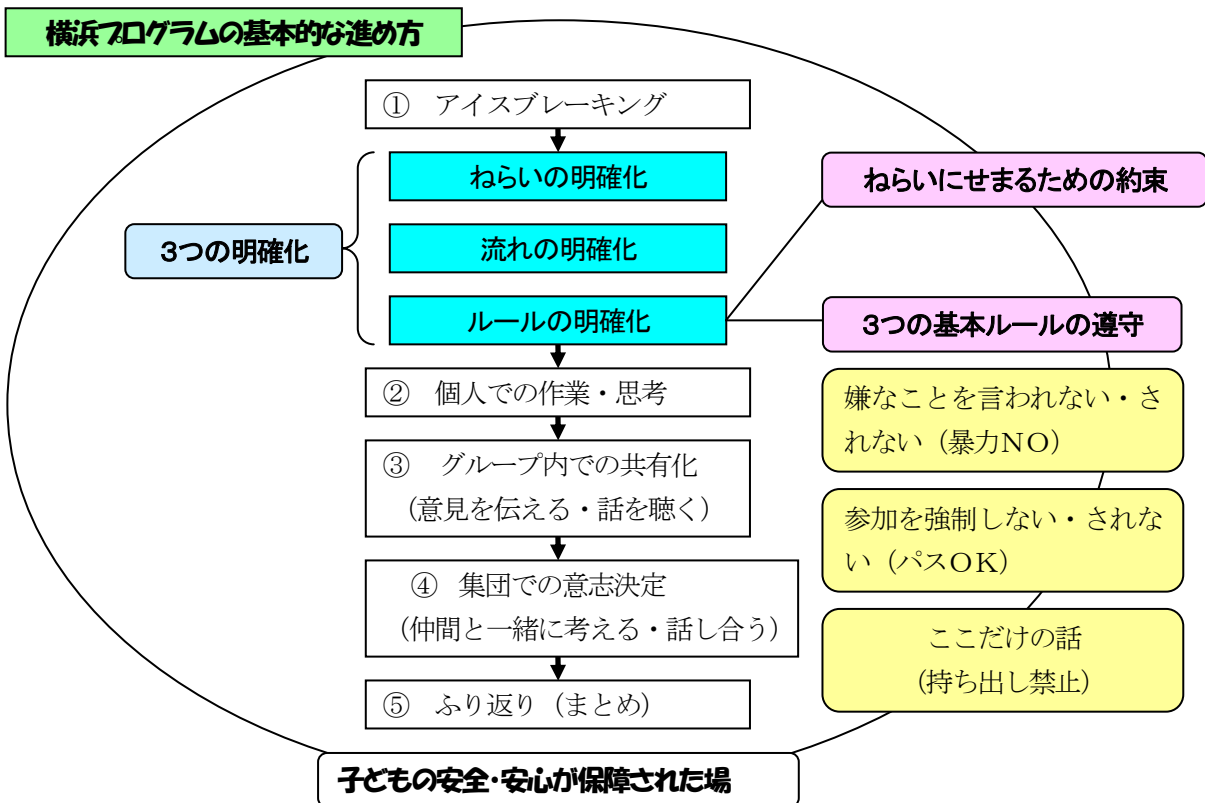
また、横浜プログラムは、集団指導（グループガイダンス）プログラムですが、“始めに集団ありき”の集団主義的なものではありません。次の図の「横浜プログラムの基本的な進め方」にあるように「個人での作業・思考」→「グループ内での共有化」→「集団での意志決定」という進め方になっています。つまり、与えられた課題に対して、メンバー一人一人の“気づき”（自分なりの見方・感じ方・考え方など）を掘り起こす個人による作業や思考を大事にしているのです。その上で、グループでの話し合いに入っていくことを基本的な

流れとしています。特に、自分づくりスキル群のプログラムが、この気づきの掘り起こしに有効です。

グループでの活動は、一人一人の気づきの“分かち合い”（シェアリング）に重点を置いたプログラムと、グループとしての“練り上げ”に重点を置いたプログラムに分類できます。

前者の分かち合いに重点を置いたプログラムは、いわば“癒し系”のグループカウンセリングプログラムです。特に仲間づくりスキル群のプログラムが、この分かち合いに有効です。仲間づくりスキル群のプログラムは、気づきの分かち合いという相互理解の取組を通して、人権意識の育成と“心の居場所”づくりに効果があります。さらに、不登校予防の学級風土づくりに有効な手立ても、主に、仲間づくりスキル群のプログラムの中に用意されています。

一方、後者の練り上げに重点を置いたプログラ



ムは“骨太系”のグループワークプログラムです。自分たちのグループならではの価値や基準、文化を創造する取組を通して、協働意識の育成と“学級文化づくり”に有効です。これは、主に、集団づくりスキル群のプログラムの中に、用意されています。

こうした“骨太系”のグループワークプログラムの取り組みが、子ども達のいじめ問題の予防に有効であることを、いじめ研究の第一人者であるD. オルヴェースとS. シャープは指摘しています。

自分たちのグループならではの練り上げを大事にし、独自の学級文化創造を目指す集団づくりは、横浜プログラムの“ヤマ場”と言えます。この集団づくりスキル群(⑴⑸)には、課題遂行機能の発揮が期待されるプログラムと合意形成機能の発揮が期待されるプログラムが用意されています。どちらも“熟”慮と討“議”の話し合いを通して解決策を探る“熟議”の場をクラスに確保することをねらいとしています。

これらのプログラムの導入にあたっては、特に次のような実施上の留意点を、子ども達の発達段階に合わせてかみ砕いて説明することが教師に求められます。

- 1) 制限時間内は、充分納得できるまで話し合ってください。
- 2) 特定のメンバーが、一方的に仕切ったり方向づけたりすることのないように留意してください。
- 3) 面倒くさいからといって、すぐに多数決とか平均値を出してみるといった安易な解決法は避けて下さい。
- 4) 少数意見は合意形成の妨げとみなすより、考え方の幅を広げてくれるものとして、尊重することが大切です。
- 5) 性急な意見の集約により、メンバー間に感

情的なしこりが残らないように留意して下さい。

以上をまとめますと、横浜プログラムの特徴は、個人検討からグループ検討へ、グループ検討は、さらに、グループカウンセリング系からグループワーク系へ、つまり、個から集団へという方向性を大事にしている点だと言えます。

なお、横浜プログラムのようなガイダンスプログラムに対して、“教師の手のひらの中で子ども達を泳がせている”だけ、子ども達を“指示待ち”にするという批判が、自治活動を重視する立場の人たちから指摘されています。確かに、いつまでも教師主導のガイダンスプログラム止まりでは問題があると思います。ただ、前述してきたように、現代の子ども達の人間関係形成の困難状況からして、いきなり子ども達主導の自治活動的プログラムから入るのは難しいと言えます。まずは、困難状況を緩和するガイダンスプログラムから入って、彼らの発達段階やグループの成熟度に応じて、徐々に子ども達主導の自治活動的プログラムにシフト(転換)していくことが望まれるのです。

その橋渡しの取組として、子ども達が小集団で楽しみながら、「集団遊びを、みんなで創って、みんなでやってみて、みんなで検討する」といったPlan-Do-Seeを徐々に子ども達に委ねていくプログラムの運用が必要です。例えば、グループでの検討課題の設定を、テーマ指定からテーマ選択へ、さらには、テーマフリーに徐々に切り替えていくなど、現場の先生方が、学級の状況にあわせて、課題設定やプログラムを改編し、活用されることを期待します。

(横浜国立大学 犬塚 文雄)

2 「子どもの社会的スキル横浜プログラム」の特徴

「子どもの社会的スキル横浜プログラム」には、以下の3つの大きな特徴があります。

- (1) 教育課程に位置づけられること。
- (2) 発達課題からとらえたプログラム構成であること。
- (3) アセスメントによるプログラム選択ができること。

(1) 横浜プログラムの概念を活用した

教育課程への位置づけ

横浜プログラムは、現場の教師が、カリキュラムの中で実施可能な指導プログラムとして作成したものです。各学校の実態に応じて、課題となるスキルの育成を教育課程に位置づけ、各教科、道徳、特別活動、横浜の時間などすべての教育活動にクロスカリキュラムとして計画的に組み入れ、指導できるよう年間計画を作成してください。

クロスカリキュラムとは、教科等の学習活動のねらいを達成しながら同時に、横浜プログラムとしての目的を達成するという視点です。例えば、「57 漢字トランプをしよう」では、漢字は偏やつくりという同じ部分をもった仲間に分類できることが分かることが国語科としてのねらいです。それとともに、ここでは、グループのトランプ遊びに楽しく参加するという⑧のスキル「仲間に加わる」、トランプをとったときにその理由をはっきり相手に告げるという⑤のスキル「はっきり伝える」という、横浜プログラムとしてのねらいがあります。また、「107 あなたならどうする」では、「⑩問題や課題の解決策をみんなで考える」というスキルを身につける活動の中で、チェーンメールへの考え方をまとめ、その対処方法を学級として決めていく特別活動のねらいの達成が求めら

れています。こう考えると、横浜プログラムは、本書で挙げたプログラムだけでなく、実際の授業の中でいくらかでも創り出すことができます。横浜プログラムは、いわば<概念>なのです。

(2) 発達課題からとらえたプログラム構成

～18のスキルの構造～

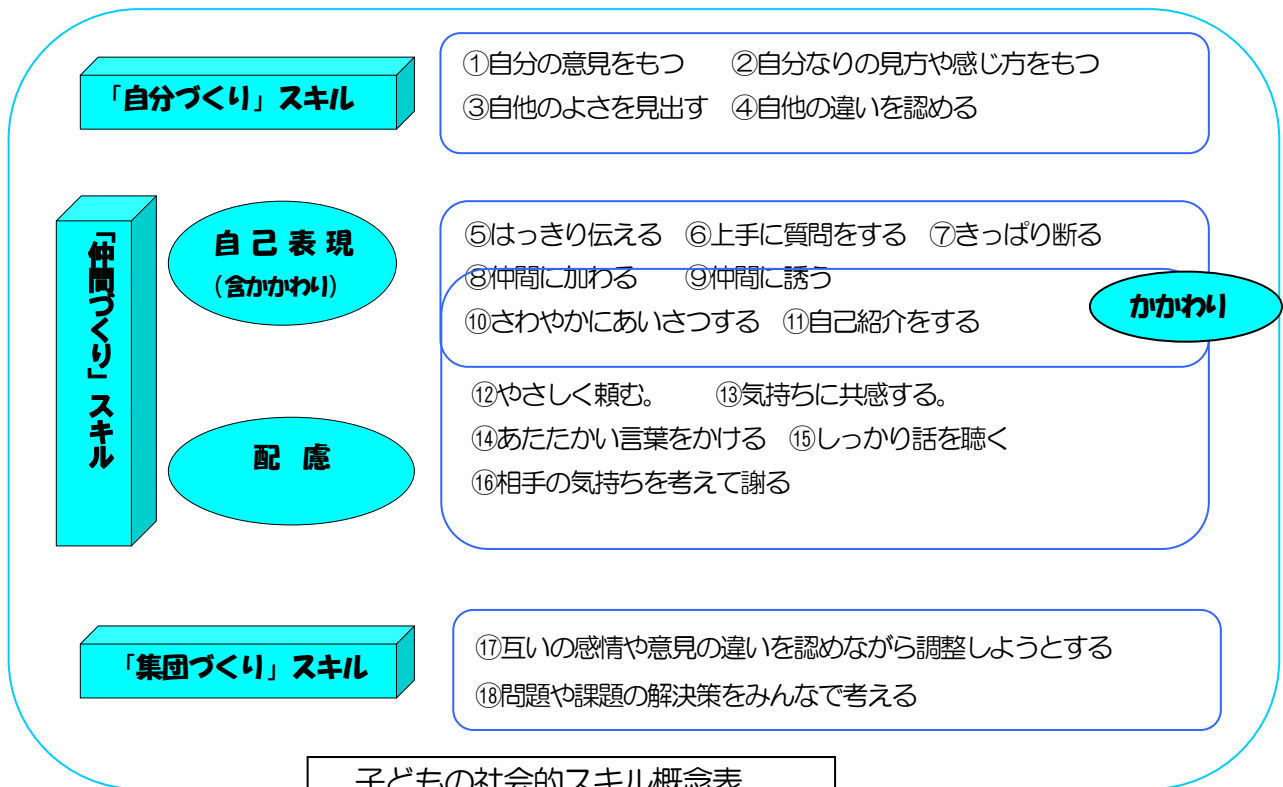
横浜プログラムは、「3基本体験の不足」を補うため、「自分づくり」「仲間づくり」「集団づくり」の3つのアプローチの視点からの体験を通して、子ども自身の「気づき」や「分かち合い」から、基本スキルを身に付けられるように構成しています。個人としての成長やメンバー間のコミュニケーション、所属集団へのかかわり等の視点から、18の社会的スキルを想定しました。

<自分づくりスキル>は、①～④、<集団づくりスキル>は⑭⑮です。<仲間づくりスキル>は下位概念として<自己表現>と<配慮>の2つをもち、<自己表現スキル(かかわり含む)>には⑤～⑪、<配慮スキル>には⑫～⑯があります。そして、<自己表現>は、<かかわり>という⑧～⑪のスキルを内包し、<かかわり>は<自己表現>と<配慮>の2つの下位概念をつなぐ役割をしています。

<自分づくりスキル>は主に矮小化した自己である“Small I”を高めることをねらいとしています。

<仲間づくりスキル>の<自己表現(かかわりを含む)>は“Big We”を緩め、<配慮>は“Big I”を緩める役割を果たすことをねらいとしています。<集団づくりスキル>は、“Small, We”を高めることをねらいとしています。

また、横浜プログラムは、いずれのプログラムも、3基本体験の学校集団での補充をねらって作



成されたものですが、プログラム実践の場面で、指導者がどの基本体験の補充であるかのイメージをはっきりもつことで、子ども達へのアプローチの方法が明確になってきます。

(3) アセスメントによるプログラム選択

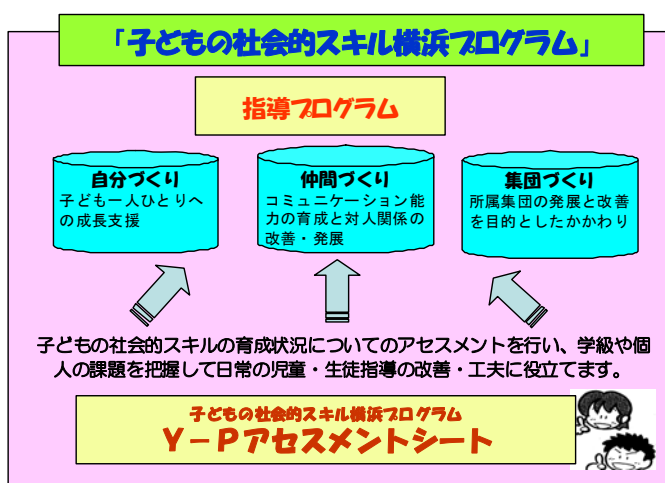
横浜プログラムは、子ども達の社会的スキルの育成状況を測定する心理尺度「Y-P アセスメント」をもっています。「Y-P アセスメント」を用いた支援検討会で、子どもや学級の社会的スキルの育成状況を把握し、必要なスキルを育成する適切な指

導プログラムを見いだすことができるように構成されています。

また、この支援検討会で、複数の教員が、自分の子どもの見え方や学級の見え方を話し合うことによって、組織として子どもや学級にどのような支援が必要かを検討し、チーム支援の体制を構築す

ることができます。それは、組織として、共通の指導観で子どもを指導・支援することであり、あたたかい支持的学校風土によって子ども達を一貫して育むことにつながります。あたたかな支持的

な学校風土は、何よりも子どもの安心・安全につながり、プログラムの効果を一層高めることとなります。指導プログラムとY-P アセスメントシートを併せて活用することで、より一層効果的な子どもの社会的スキルの育成を図ることができるのです。



3 プログラム実施上の配慮事項～自由で安心・安全な場の確保～

子ども達は、安心して自分らしさが発揮できる暖かい雰囲気の中で、他者や新たな自己と対面し、様々なかかわりを通して豊かに成長していきます。こうしたなかでこそ、存在感や有用感をもち、自尊感情を高めていくことができるのです。そこで、「自由で安心・安全な場の確保」について特に配慮しながら、プログラムを実施するようにしてください。

3ページで紹介した横浜プログラムの基本的な進め方を、再掲します。この基本的な進め方は、すべてのプログラムをこの手順で行うというものではありません。自分づくりプログラムや仲間づくりプログラムでは、『②個人での作業・思考』や『③グループ内での共有化』からそのまま『⑤ふり返り』へ行く場合もあります。また、十分に慣れ親しんだ集団では、『①アイスブレイキング』が必要のない場合もあるでしょう。それぞれのねらいによって、また、学級集団の状況によって、ど

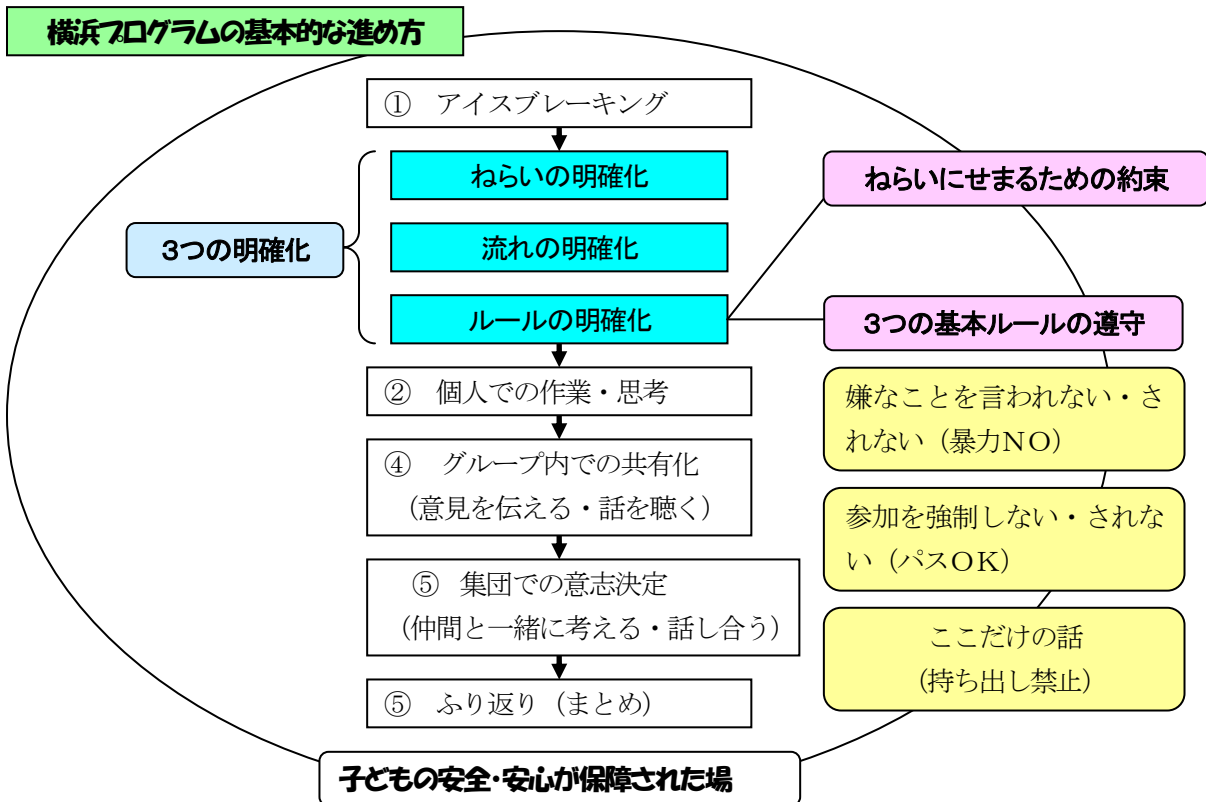
のステップを用いるか決めてください。

(1) 自由で安心・安全な場のための手だて

① アイスブレイキングの実施

アイスブレイキングとはプログラム実践のねらいを達成するために行うウォーミングアップのことで、過度の緊張をアイス（氷）に例え、これを打ち砕く（ブレイクする）ことを意味します。

横浜プログラムは、学級の自由で安心な場の雰囲気の中でこそ、十分に効果を発揮するものです。そのために、子ども一人ひとりの心と体の緊張をほぐすとともに、学級集団の緊張をほぐし、子ども達の人間関係を円滑にする潤滑油の役割を果たすのが、アイスブレイキングです。安心してリラックスした雰囲気を創り出すゲーム的な要素を盛り込んだショートプログラムがアイスブレイキングに適しています。具体的には、替え歌などの声を発するもの、手遊びやランダムウォークなど軽



く身体を動かすもの、心理ゲームなどがあります。主活動のねらいと関連する活動を取り入れるとさらに、効果をあげることができます。

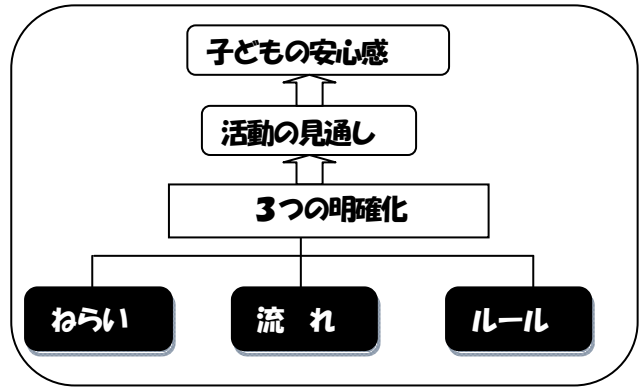
本書の指導プログラム中には、導入にアイスブレーキングを記載していませんが、実施にあたっては、主活動のねらいを引き出すアイスブレーキングを選んで用いてからプログラムに入ることが効果的です。

また、アイスブレーキング向けのショートプログラムを「アイスブレーキング集(282ページ)」として掲げました。また、プログラム一覧中に、アイスブレーキングとして使うことができるプログラムには、印が付けられていますので、活用してください。

② 3つの明確化 ～ねらい・流れ・ルール～

横浜プログラムの実施にあたっては、活動のねらい・流れ・ルールの3つを明確にしてください。主活動に入る前に「ねらい」「流れ」「ルール」を掲示物にする等して明示し、十分に理解できるように説明します。今、何のために何をやっているのか、次に何をやり、最後には何をやるのかということを、子ども達が確認できるようにすることが大切です。このことによって、子どもが活動に見通しをもち、安心して活動に参加できることや、活動内容に興味や関心をもって意欲的に参加する効果も期待できます。

また、ルールとして、どのプログラムにも共通の「3つの基本ルール」と、プログラムによって違う「ねらいにせまるための約束」の両方を明確にします。「3つの基本ルールについては、後に詳しく述べます。「ねらいにせまるための約束」とは、例えば、「37認め合いペア音読」では、「いいところやがんばったところを書く」「アドバイスはしない」という二つの約束があります。このプログラムでのばしたいスキルは「③自他のよさを見いだす」であり、ねらいは「いいと

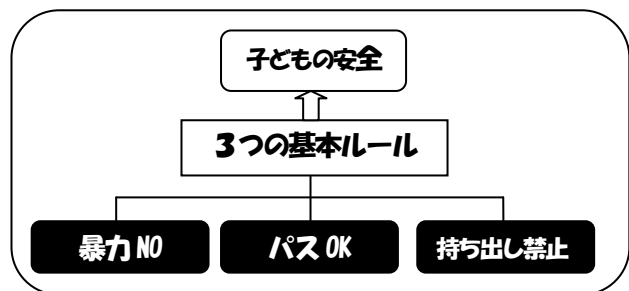


ころやがんばったところを見つける」です。ですから、活動の中でアドバイスをしてしまうと逆効果になる可能性が出てきてしまいます。そのため「アドバイスはしない」という約束を明確にしておくのです。

以上のように「ねらい」「流れ」「ルール」の3つを明確化することで、誰もが安心してプログラムのねらいにせまる活動を可能にすることができます。

③ 3つの基本ルール ～暴力NO・パスOK・持ち出し禁止～

グループカウンセリングやグループワークなどの活動では、他者との感情の交流や自分自身を振り返る場面などで、衝動的な言動や執拗な自己や他者への批判などが出てしまうことがあります。このような場面に遭遇した参加者が、自尊感情を傷つけられ、心的外傷を負う可能性も否定できません。そこで、実施にあたって、参加者の活動の安全を確保するため、次の3つの基本ルールの徹底を図る必要があります。



暴力NO

「友達の嫌がることは言わない、やらない」を徹底します。明らかに暴力や言葉の暴力はもちろんですが、からかいや揶揄等の微妙な雰囲気や指導者がよく感じ取ることが必要です。グループ体験の中では率直な自己開示が必要な場面がありますが、そこでも子ども達の中にグループのメンバーに対する配慮が必要です。言葉が率直な気持ちの交流となるか暴力となるかは、学級集団の底流に温かさの風土があるかどうかが大きく影響します。指導者がよく見極め、配慮しながら進行します。

パズOK

子ども達の中には、様々な危機に直面し、「今は、そんな気持ちにはなれないよ」という心境の子どもがいる可能性があります。そうした子ども達に思いをめぐらし、絶対に参加を強要しないこと、また、参加を強制しようとする雰囲気を抑えることが必要です。もちろん、活動に参加できないことが集団の中でネガティブに影響しないよう十分なケアをしていくことも大切です。そのためには、参加できない子どもに、何らかの役割をあてがったり、できる限りその場において活動を見ていたりすること、また参加できる気持ちになったら、いつでも参加できることを伝えたりする等の、個別の配慮が必要です。

持ち出し禁止

プログラムの中で交わされた情報が活動以外の場面に持ち出され後から辛い思いをさせられる子どもが出ることも予想されます。活動の最初のルールとして、活動中でのことは、その場限りのこととして、後では話題にしない、また、この場にはいない人には、絶対にしゃべらないという「持ち出し禁止」のルールを徹底しておくことも、子どもの安心・安全を保障する大切なことです。

(2) 子どもの安全の確保のための指導者の役割

プログラムを選択するに際しては、3つの基

本ルールを集団の中にきちんと機能させることができるかどうか、指導者があらかじめ判断しておくことが大切です。危険が少しでも予想されるなら、前もって予防策を講じたり、プログラムをシンプルな形に変更したり、活動中の指導者を複数にして個への配慮を手厚くしたりする等の配慮が必要です。プログラムの実施にあたっては、子どもの安心・安全を保つために指導者が学級をコントロールできる状況にあるかどうかを、しっかりと見極めた上で、進めていくことが大切です。普段は一見穏やかな集団であっても、プログラムによっては、グループのダイナミクス等により、指導者のコントロールが機能しなくなってしまう場合も考えられます。

もしも、この3つの基本ルールが守れない子どもがいた場合には、きちんと注意したり、場合によっては活動をやめさせたりして、子どもの安全確保に努めるという緊急な判断ができることも、指導者としての大事な力です。指導者の毅然とした対応は、場の安心・安全に対する子どもの信頼感を増し、子どもの心を開きます。その際、子どもの行った行動について注意するのであり、子どもの人格を否定するものであってはなりません。

(3) 個を生かす配慮

横浜プログラムでは、グループの活動を通して自分自身や他者とのかかわり方を学び、一人ひとりが集団の中での相互理解を深め、学級や所属集団の文化や価値を共有し、これを向上させようとする意欲や態度を形成していくことをねらいとしています。その過程で一人ひとりが自己有用感や自己肯定感を実感し、自己の存在を確認できるような自己検討の場面を設定することも大切です。

集団活動の苦手な子どもは、プログラムへの参加そのものへの抵抗感が強い場合も考えられます。

それらの子どもに対しては、事前にやることを十分説明しておき（3つの明確化を十分に図る）、不安感の軽減を図ることが必要となるでしょう。それでも抵抗感がある場合は、パスOKであることを伝え、決して無理強いしない、させないことを約束します。そのような子ども達の状況であっても、状態に応じた参加の仕方を工夫していくことは教師の大事な役割と言えます。



4 効果的なふり返り

プログラムの終結には、活動のふり返りを実施します。ふり返りには、①自分自身のみで行う（自己評価）、②小グループで行う、③全体で行う（相互評価）の3つのパターンがあります。ふり返りは、自分自身や仲間や集団との折り合いをつけるために大きな役割を果たしますので、必ずどれか一つは時間をとって実施するようにします。

(1) ふり返ることの意味

ふり返りでは、活動を通して学んだことをグループなどで話し合い、自分の言動や他者との関係のあり方、集団との関わり方などについての気づきを共有することを大切にします。こうした過程を通して、子ども同士がお互いの気持ちを理解し、相互に理解しあえるようになるからです。

ふり返りを行うことは、自分が体験した感情や意味を意識化・言語化し、明確にすることです。また、他者の感想を聞いて、自分の考えや感情、あり方に気づくという自己認知の拡大が起こります。

このプロセスで、体験が＜経験＞へと転化し、内在化された学びとなっていきます。＜学ぶ＞とは、体験したことを次の機会に生かすことができるようになることであり、個人の考え方や行動様式に変容が起きることを意味します。自己の気づきを友達に受け止められたり、友達の気づきや考えと比べたりすること（集団からのフィードバック）

は、自己を対象化することとなり、プログラムでの体験が経験としての学びにつながることを促進します。

(2) ふり返り時間の持ち方

プログラムを計画する段階で、十分にふり返りの時間を確保するようにしてください。楽しいプログラムであればあるほど時間ぎりぎりまで活動し、ふり返りがおろそかにされてしまうことがあります。それではプログラムのねらいが十分に達成できません。落ち着いた時間と環境の中でのふり返りとなるよう、留意してください。

朝や帰りの会等で日常的に行うプログラムのような場合には、毎回は簡単な感想の交流のみにして、1週間分や1ヶ月分をまとめてふり返ったほうが効果的な場合もあります。場面や目的に合わせて柔軟に行ってください。

(3) 大切にされる子どもの気づき

ふり返りの時間は、横浜プログラムの3基本ルール（暴力NO、パスOK、持ち出し禁止）が厳格に適用されなければなりません。

個人の気づきや感じ方は、それぞれが尊重されなければなりません。活動のめあてと異なる気づきや感情を表現したとしても、そのことで非難されたり、指導されたりすることがあれば、子どもにとってその場は安心・安全な場ではな

なくなってしまう。子どもは自分の素直な感情を口にするをはばかり、活動の場は、ありのままの自分自身や友達を感じる場ではなくなくなってしまうでしょう。

このことは、子ども達だけでなく、指導者も意識する必要があります。

指導者は、その役割から、活動のねらいを達成するために、子どもの発言の内容を解釈したり、評価したり、ねらいに方向づけたりしたくなるものだというのを、十分に自覚しておくことが必要です。

大切なのは、たとえめあてが達成できなくとも、そこに至らないその子のありのままをしっかり指導者が受け止めることです。さらに、子ども達が、活動のねらいが達成できない状況とどう向き合うか、見極めることも必要です。めあてに至らないことを、自分自身や友だちへのいらだちや攻撃へと転嫁しないよう教師がフォローし、できない現実から、前向きに努力しようとする姿勢を引き出すことが大切です。

(4)まとめる

ふり返りでは個人の気づきを尊重するとすれば、〈まとめる〉という言葉は、不似合いに映るかもしれません。グループ・アプローチの終結はオープンエンドであるとの考え方もあります。

しかし、横浜プログラムの特徴として、教科等とのクロスカリキュラムであること、アプローチとして「集団づくり」があることの2つがあります。教科等の学習であれば、そこに教科等としての学習内容のまとめが必要です。話し合い活動が行われれば、そこに合意形成や問題解決の視点が生まれます。これらの理由から、〈まとめる〉活動が入っているプログラムがあるのです。

横浜プログラムが最終的にねらうものは、協

同的な学びによる学級文化の創造です。グループ・ガイダンス(集団指導)プログラムとして、まとめるべきところは、しっかりとまとめることが必要です。ただし、どうしても学級集団としてのまとめに納得できない子どももいることでしょう。それらの子ども達が否定されることがあってはなりません。その子の現在の納得できない状況を認めつつ、成長支援を続けることが大切です。

(5)ふり返しシートの活用

ふり返りにふり返しシートを使う場合の項目は、つぎの3つを基本カテゴリとし、4件法で行います。(289・290ページ参照)

- ① 共通項目：「活動に楽しく安心して参加できましたか」
- ② 独自項目：活動のねらいに関連した「自分への気づきや仲間への気づき、クラスへの想い、自己の生き方あり方、活動の価値」の確認等について発達段階に応じて作成します

(例)・友達にあたたかい言葉をかけることができましたか

- ・多くの人に支えられてきたことが分かりましたか
- ・仲間の意見を尊重しながら話し合いができましたか

- ③ 自由記述：自分や他者、集団とのかかわり方を確認する子どもの自己検討の場となる自由記述法を用います

ふり返しシートは必ず用いなければならないわけではありません。短いプログラム、また、楽しく活動するのが主である活動等の場合は、使わない方がよい場合もあります。短時間でも、自己の内面と向きあったり、気づきが生まれることが予想できるプログラムでは、子どもの内面を知る上でも効果的に活用したいものです。

5 横浜プログラムのフォーマットの読み方

掲載のプログラムの基本フォーマットは、右ページのようにになっています。

① 補充する基本体験

子どもが年齢相応の社会的スキルを身につける上で必要とされる三つの基本体験（被受容体験・がまん体験・群れ合い体験）を補うためのグループアプローチが横浜プログラムです。基本的にどのプログラムも三つの基本体験の補充であるわけですが、その中でも特に重点的に補充する基本体験が記載されています。プログラムを実施する上で、記載された体験を念頭におくと、プログラムがイメージされやすいでしょう。

② 育てる力・関連スキル

横浜プログラムには、自分づくり・仲間づくり・集団づくり3つのアプローチと、18の育てたい社会的スキルがあります。ここでは、このプログラムがどのアプローチのどのスキルを育てることに関連しているかが記載されます。ゴシックで記載されているのが、重点となります。

③ 活動のねらい

で囲まれた中に書かれているのが、子ども達へ提示する主活動の指示です。フォーマット中の活動のねらいには、教師がこのプログラムでどのような育ちを子どもに期待するかが書かれています。

④ ルールとねらい

②に記載された関連スキルが、どのプロセスで培われるのかが分かるように記載されています。また、プログラムを安全に実施する上で大切な三つの基本ルール（暴力 NO・パス OK・持ち出し禁止）が記載されています。また、安全確認を心がける場面も記載されます。

⑤ 学習・活動の流れ

プログラムが安心・安全のうちに展開されるためには、三つの明確化（ねらい・流れ・ルール）が必要です。最初にねらいが、次に活動の流れが説明されます。これで、子どもは活動に見通しをもつことができます。ついで、三つの基本ルールが確認されるとともに、その活動の中の約束が知らされます。これらのことが十分説明され、理解されてから活動に入ります。

⑥ 約束

三つの基本ルールは、安心・安全のために、すべてのプログラムで守られなければなりません。ここでは、基本ルール以外の、それぞれのプログラムの活動をスムーズに行ったり、効果を上げたりする上での約束を記載しました。望ましい具体的な態度等が示してあります。

⑦ ふり返る・まとめる

学習の内容として押さえなければならないことや、話し合いの中で決定したこと等をまとめます。ふり返りで出た内容について、教師がプログラムのねらいの方向にまとめたりすることとは異なります。

⑧ 配慮事項

安全にプログラムを実施するために、個別の配慮が必要な場合や、危険が考えられる場合等の具体的な対処が書かれています。

また、ふり返りシートに記載する具体的項目が書かれる場合もあります。

子どもの社会的スキル横浜プログラムの基本フォーマット概要

タイトル (活動概要)	プログラムの番号とタイトル (活動がイメージできるもの) と活動概要の簡単な説明	① このプログラムが3基本体験の特にどの体験を補充するものと考えられるか	補充する基本体験	群れ合い体験
育てる力 関連スキル	② どのアプローチの視点からのプログラムか、プログラムと関連するスキル (力) の説明 最重点をゴシック	背景	このプログラムが必要とされる背景を説明	
活動のねらい		実施時期	どの時期に行うのが効果的か (対象集団の成長の様子や雰囲気、各行事との関連など)	
対象学年		所要時間	分	活動場所
準備		活動場面 朝の会、帰りの会、教科、領域、行事等、活用できる指導場面と望ましい単位		
学 習 ・ 活 動		支援の観点・留意点等		ルールとねらい
導入	○活動のねらいを知る 握手ゲームで、たくさんの人に人と友達になろう	③ 主活動に関わる教師の指示を枠で囲む		④ 達成されるスキルと、3基本ルールや、安全上の配慮や確認を記載
主活動	○活動の流れ (やり方・内容) を知る	本プログラムの中で、特に指導者が留意すべき点を説明する また、プログラム実施による自己有用感や成就感など、ポジティブな効果も示す		
	○約束を知る	⑤ 学習・活動の流れを示す 三つの明確化 (ねらい・手順・ルール) を図るために、○ねらい ○流れ ○約束 の3つを知らせてから、活動に入る		
	○活動する	⑥ 3基本ルール以外の約束を記載 プログラムの効果を高めるための約束であり、集団の状況によって、アレンジ可能な約束		
振り返り	○ふり返る ○まとめる	⑦ 教科や領域等の活動の内容のまとめ、話し合いの合意等を記す		
配慮事項	⑧ 本プログラムの実施上の配慮事項 <ul style="list-style-type: none"> ・ 個を生かす配慮を具体的に提示する (事前のアナウンス、チャレンジの奨励と事後のケア、個別の配慮等) ・ 安全確保のための手続きについての明確化を具体的に記載する ・ プログラム特有の振り返りの具体項目を記載する 			

6 プログラム実施計画の作成

～子どもの社会的スキルを体系的、計画的に育成するために～

子どもの社会的スキルは、体系的、計画的に育成すると効果的です。子どもの社会的スキル育成の年間計画を作成し、教育課程に位置づけることで、子ども達が、授業や行事、日常のさまざまなふれあい体験を通して、社会的スキルを身につけていくことができるようになります。

年間計画作成の方法

(1) 9年間のスパンで育成する子どもの社会的スキル

- 学校教育目標、発達段階や昨年度の学年の児童の実態、教師の願い、年間行事等を考慮して、6年間（3年間）を通して、どのような力を子どもにつけたいかを考え、6年間（3年間）に盛り込む社会的スキルプログラムの基本計画を立てます。小中一貫教育の視点から、9年間を見通しておくことがより効果的です。次ページに9年間を見通した基本活動例を掲げました。

(2) 学年・学級の年間計画の見直しをもち、実態にあわせて修正する

- 6年間や9年間の基本計画をもとに、学級開きの時期にどのようなプログラムを入れるか、行事をどう活用するか等について学年で話し合い、方針を決定します。
- 学級がある程度固まった時期に、Y-Pアセスメントシート等を用いて学級の実態をつかみ、年間計画を見直します。年間計画は、学級の実態、行事や学習の年間計画等とのつながりを考えて、逐次変更していきます。

(3) 効果をイメージしてプログラムの選択をする

- 活動のねらいをよく考え、プログラムを選択します。実施によって、どのようなスキルが育成され、学級にどのような効果をもたらすのかをイメージしてください。学級の状況によっては、プログラムの実施がよい結果をもたらさない場合も考えられます。注意深く学級の状況を把握し、安全に実施できるプログラムであるかを判断した上で選択します。
- 現代社会の課題である防犯やネット、人権等に関わるプログラムも、発達段階や学校の実態に応じて、積極的に盛り込んで作成してください。
- プログラムの進め方は、子どもの実態に合わせてアレンジし、より効果的な活用を工夫してください。

(4) 教科等の授業に横浜プログラムを活用し、教育課程の中に位置づける

- プログラムで扱う素材は、教科等で扱う教材・題材と置き換え可能なものが多くあります。教科等の授業に「横浜プログラムの基本的な進め方」を取り入れ、教科等のねらいを達成しながら、本プログラムのねらいも併せて達成すること（クロスカリキュラム）を検討し、効率よく活用してください。
- 特別活動や道徳の活動場面のプログラムが多くなりがちです。それぞれの年間時数を考慮して活用してください。総合的な学習の時間では、体験を通じた問題解決の過程での子どもの気づきや他者との交流によって、ねらいが達成できることがあります。

(1)の例 9年間のスパンで育てる社会的スキル

ここに掲げた基本計画例は、様々な領域を網羅的に配置してありますので、各学校で重点を決めて基本計画を作成してください。各学校で作成した基本計画をふまえ、それぞれの学年・学級の課題改善のためのプログラムを提案して、学年・学級の年間計画を作成します。

9年間を見通した基本計画例

	自分づくり			仲間づくり			集団づくり	
1年	友達カルタ		まねっこ行進	友達を見つけよう		知らない人に 出会ったら	カラフルロードを わたりきろう	
2年	ホメホメ大作戦		きれいに 響かせよう	ステップアップ スピーチ 記憶お絵かきゲーム		つながったね みんなの心		
3年	リズムでつなごう みんなの輪	堪忍袋	ぎゅっと団結!	今日の気分は		こおり鬼	フルーツポンチ	
4年	あなたのよいところは	気持ちを整理しよう	支えあうって すてきなね	「ありがとう」の一言	お願いします	聴き方上手に なれるかな	安全マップを 作ろう	
5年	ナイス! アイデア!	考え方を 広げよう	たおさずキャッチ	「ごめん」の一言 サイコロ・ ペアトーク	相手も自分も大切 にする伝え方	ありがとうを あなたに	あなたなら どうする	
6年	欠点も見方を かえればいいところ	イライラや不安・悩み解消法 を見つけよう	円陣手つなぎ 風船リレー	将来の夢は	はっきり断る		クラスを パワーアップ	
小学校縦割り活動 小学校全校集会活動		仲間づくり						
		名刺交換よろしくね	力を合わせてシュート&キャッチ	なかよし握手	勝て勝てパワーじゃんけん	手つなぎ鬼	フープ送りリレー	
	自分づくり			仲間づくり			集団づくり	
中1	未来予想図			彼・彼女の好きなこと	上手な断り方	あなたの悩みに お答えします	なんて言うかな	
中2	自分を パワーアップ		友達紹介をつなごう	自己紹介すごろく	わたし言葉で 会話しよう	私は誰でしょう	ホームレスについて 考えよう	
中3	たくさんの葉	怒りの気持ち どう乗り切る				体と心はつなが てる!?	日本脱出 全員リレー	

(2)の例 学年・学級の見通しをもち、実態に合わせて修正する

次のような手順で、年間計画をたてます

- ① 教育目標と学年（学級）の実態をふまえ、＜こんな学年・学級にしたい＞というゴールを思い描く
- ② いつ・どんなタイミングで・どんな力をつけるかを定める
 - ・それぞれの期間の目標をたてる（3期に分けて考えてみる）
 - ・月の流れや行事を考えてプログラム選択の見通しをもつ

時期	4～7月	9～12月	1～3月
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係づくり、ルールづくり ・友達関係の輪を広げる ・学級内での居場所づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達を深く知る ・学級集団の確立等 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級集団の完成 ・学級全体の凝集性 ・学級集団との別れ等
プログラムの選択の見通し	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい友だちや先生との人間関係づくり ・自分や友だちのよさを認める ・防犯安全(以上4～5月) ・行事に際し、友達といることのよさを感じる（自己効力感・自尊心の高揚）(6月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期休み後、久しぶりの友達との人間関係づくり(9月) ・前期・後期の区切り(10月) ・人権週間に合わせ、自他の違いを尊重する(12月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期休み後、久しぶりの友達との人間関係づくり(1月) ・友達との別れ、学級の成長(3月)

- ③ 3期にわけた目標や見通しができたら、次ページに示したような月ごとの計画をたてる
- ④ YPアセスメント支援検討会を行い、より適切なプログラム選択をして、計画に修正を加える



横浜プログラム年間計画例（低学年）

学級の実態
教師の意図

友達づくりが苦手な子が多く仲間意識が育っていない。
友だちとふれあう機会を意図的につくり温かい交流ができるようにしたい。

月	主な行事等	時間	タイトル	関連する力	ねらい
通年		朝の会 3分	みんな元気！ 健康観察	仲間づくり	朝の健康観察で、友達から名前を呼ばれ自分の元気を伝える活動。友達の様子を知ることによって人への関心を高める。
		帰りの会 10～15分	あなたのこんなところがステキ	仲間づくり	友達のすてきなところをかけたステキカードを帰りの会で渡す。温かい言葉がけが自然にできるようになる。
		国語 10～20分	認め合いペア音読	仲間づくり	音読を聴きあって誉め合い、認め合う経験をもつ。
4	始業式 一年生を迎える会	学活 5分	なかよしあくしゅ	仲間づくり	出会ったとき互いに片手を出し合い、同じ手がでたら握手するゲーム。友だちとふれあう喜びを感じる。
		朝の会 5分	トントン名前呼びゲーム	仲間づくり	2回手をたたいて名前を呼び合うゲーム。日常的に友達同士が自然に名前を呼び合うことができるようにする。
		縦割り 15分	名刺交換よろしくね	仲間づくり	自己紹介のための名刺カードを作り、名刺交換ゲームをすることで多くの人と関わるきっかけをつくる。
5	運動会	帰りの会 5分	いいところつけて、 ビー玉いっしょにしよう	自分づくり	友達の良いところを発表すると玉がびんにたまっていく。互いのよさを伝えあい自己肯定感を育てる。
		学活 45分	知らない人に出会ったら	自分づくり	ロールプレイを通して、危険回避能力を身につける。
		学活・音楽 45分	みんないっしょに	仲間づくり	合い言葉によって目標を意識させて、目当てやルールを守りながら友だちと一緒に遊ぶ体験をする。
6		学活 25分	なにか好き	仲間づくり	好きなものが同じもの同士集まって、わけを尋ねあう。友達の話をしっかり聞きながら友達理解を深める。
		体育 5～15分	まねっこ行進	仲間づくり	同じ動きをまねしながら行進し仲間意識を高める。
7	夏休み	国語 20分	友達を見つけよう	仲間づくり	友達の特徴を聞きもらさないよう注意して聞き、誰のことかあてるゲームで、聞く力を養う。
		学活 30分	木の中のリス	仲間づくり	オオカミ、木こり、嵐の3つの言葉で、動くゲームをして多くの友達とかかわりをもてるようにする。
9	早期人間関係回復 ふれあい遠足	朝の会 5分	手拍子チームワーク	集団づくり	リズムを合わせた手拍子で心をつなげる楽しさを味わう。
		学活 45分	みんなで協力 なかまを見つけよう	仲間づくり	自分と共通することをみつけた楽しさを味わったり、ルールを守って友達を見つけたりする楽しさを味わう。
10	前期終業式 後期始業式	体育 5分～15分	ごあいさつ	仲間づくり	体の触れ合いで遊びで多くの友達との信頼感を育む。
		帰りの会・道徳 15分	ふわふわ言葉と 千クク言葉	仲間づくり	気持ちが温かくなったり辛くなったりした言葉を出し合い、その感情に気づき、温かい言葉を使う気持ちを育む。
11	創立記念日	国語 20分	友達カルタ	仲間づくり	友達の良いところをお互いに認め合い仲間意識を育てる。
		算数	リスム九九遊び	仲間づくり	友達とゲームをしながら協力して九九や計算の習熟を図る。
12	冬休み	体育・学活 5分～	輪くぐりリレー	仲間づくり	協力することの大切さやグループの一体感を味わう。
		図工・国語	記憶力お絵かきゲーム	仲間づくり	はっきり伝えたりしっかり聞いたりする力をつける。
1	早期人間関係回復 不審者対応訓練	体育・学活 20分	モーモーリング	集団づくり	手をつないだままで輪になって、フラフープを一周させる。人の温かさや協力することの楽しさを感じ取る。
		生活・道徳 45分	大切にしてくれた家族 にありがとう	自分づくり	家族からの手紙を読み、自分も友だちも同じように大切にされて育ってきたことに気づき、家族へ感謝する。
2	作品展	道徳 45分	ごめんの一言	集団づくり	謝る必要のある場面のロールプレイを通して、自分が悪かった時に謝ることの大切さを感じる。
		体育・学活 5～	人間ちえの輪	仲間づくり	輪になって手をつないだまま知恵の輪を作り、相手チームがほどく。仲間と気持ちを合わせるよさを実感する。
3	卒業式・修了式	朝・帰りの会 45分	わたしていいな ホメホメ大作戦	自分づくり	友だちの良いところをカードに書き交換することで、自分のよさを認め、自信がもてるようになる。
		学習のまとめ	みんなでピンゴ！	自分・仲間づくり	グループの友達と協力しながらピンゴカードに書くことを通して、仲間意識を深める。

横浜プログラム年間計画例（中学年）

学級の実態
教師の意図

学級のルールを守れず、自分の気持ちや欲求のまま行動する児童が多い。
集団で遊ぶ経験を増やして、相手を思いやって活動できる学級集団にしたい。

月	主な行事等	時間	タイトル	関連する力	ね ら い
通年		国語 10分	ミニ漢字テスト	自分づくり	10問だけの漢字テストの取組を通して、努力すれば満点がとれるという達成感を一人残らず全員が感じとる。
		国語 10～20分	認め合いペア音読	仲間づくり	音読を交互に聴きあい、いいところを評価し合うことにより、日常接することの少ない子同士も、認め合うという経験をもつ。
		朝の会 5～10分	ステップアップスピーチ	仲間づくり	学級全体の前でスピーチを行う経験の積み重ねを通して、相手にはっきり伝える力を身につける。
4	始業式 一年を迎える会	集会 10分	なかよしあくしゅ	仲間づくり	大勢の友達に進んで声をかけ、握手ゲームを楽しむことにより友達とふれ合う喜びや温かさを感じる。
		朝の会 15分	先生を知る イエスノークイズ	仲間づくり	先生に関するクイズを行い、子どもとの関係作りを行う。
		縦割り 15分	名刺交換よろしくね	仲間づくり	自己紹介のための名刺カードを作り、名刺交換ゲームをすることで多くの人と関わるきっかけをつくる。
5	運動会	集会 15分	こおり鬼	仲間づくり	身体を触れ合いながら鬼ごっこをすることで、より多くの友達と信頼体験（助ける・助けてもらう）をする。
		朝の会 5分	手拍子チームワーク	集団づくり	学級全員でリズムを合わせた手拍子をすることにより、学級のみならず心をつなげる楽しさを体験する。
6		総合・社会 45分×3	身近な道路の 安全マップを作ろう	自分づくり	学区の安全マップづくりを通して、危険を感じ、回避する力など、安全を見極める能力を調査を通して体験的に身に付ける。
7	体験学習 夏休み	朝・帰りの会 10～15分	あなただのこんな ところがステキ	仲間づくり	友達のすてきなところをかいたステキカードを帰りの会で渡す。温かい言葉がけが自然にできるようになる。
		保健 45分	生活たんていになろう	仲間づくり	友達の生活習慣を質問し答えを予想する。友達に興味をもたせるとともに温かなアドバイスをを行うことができるようにする。
9	早期人間関係回復 ふれあい遠足	国語 15分	サイコロベアトーク	仲間づくり	少人数の相手に話す経験を積み重ねることにより、話すことに慣れ、伝えたいことを言葉にすることへの抵抗感をなくす。
		体育 15分	人間ちえの輪	仲間づくり	ちえの輪をほどこく作業を通して、コミュニケーションの大切や仲間と気持ちを合わせることの大切さを実感する。
10	前期終業式 後期始業式	道徳 45分	なんていうかな	自分づくり	問題場面での答えを友だちと話し合うことにより、トラブルの解決策を考えたり謝り方を身につけたりする。
		体育 45分	こころをひとつに合せて ～スポーツバレー～	仲間づくり	全員が一体となってスポーツバレーを動かす体験をし、集団の一体感を味わい、仲間意識を高める。
		集会 15分	ぎゅっと団結	仲間づくり	心をつなげて成功体験を得ることで、仲間への信頼感を強める。
11	総合発表会 創立記念日	学活 20分	欠点も見方を変えれば ほいほいところ	自分づくり	ものを見方を変えることにより物事の受け止め方が変わり、自分や友達のよさに気づくことができるようになる。
12	冬休み	道徳 45分	「ごめん」の一言	集団づくり	謝る必要のある場面のロールプレイを通して、自分が悪かったときに謝ることの大切さを感じる。
1	早期人間関係回復 不審者対応訓練	学活・道徳 15分	ふわふわ言葉と 千ク千ク言葉	仲間づくり	気持ちが温かくなったり辛くなったりした言葉を出し合い、その感情に気づき、温かい言葉を使う気持ちを育む。
2	作品展・クラブ発表会	朝の会 10分	堪忍袋	自分づくり	自分の見方や感じ方を失わないで感情をコントロールしたり、ストレスを冷静に受け止めたりできる。
		学活 45分	さわやかな言葉のかけ方	集団づくり	3つの話し方のタイプについて知り、それぞれを体験し、さわやかな伝え方を考えることで、日頃の自分や友達の話し方に気づく。
3	卒業式・修了式 六年送会	道徳 45分	たくさんの葉	自分づくり	お世話になった人との関わりをふり返り、自分が多くの人との関わりによって生きている事を意識する。

横浜プログラム年間計画例（高学年）

学級の実態
教師の意図

友だちとの関わりが希薄で、小グループで固まり易い。失敗や非難を怖れ、自分を出さない傾向がある。一緒に創り上げたり、互いの思いを知ったりする体験を通して、集団の中に信頼感と連帯感を育てたい。

月	主な行事	時間	タイトル	関連する力	ねらい
通年		朝の会 5～10分	ステップアップスピーチ	自分づくり	スピーチを通して、相手にはっきり伝えたり、話している人の気持ちを考えながら耳を傾けたりすることの大切さを実感する。
		国語 10分	ミニ漢字テスト	自分づくり	10問だけの漢字テストの取組を通して、努力すれば満点がとれるという達成感を一人残らず全員が感じとる。
4	始業式 一年生を迎える会	学活 25分	なにかがすき	仲間づくり	他者の話を聞き、自分と似ていたり違っていたりする友だちの存在を知り、相互理解を深める。
		国語 20分	自己紹介すごろく	自分づくり	簡単な遊びを通して、自分を理解してもらい伝え方や人の話を聞く態度を養う。集団の中で自己表現できる練習の機会とする。
		縦割 10分	名刺交換よろしくね	仲間づくり	自己紹介のための名刺カードを作り、名刺交換ゲームをすることで多くの人と関わるきっかけをつくる。
5	運動会	国語 15～30分	ナイスアイディア	自分づくり	学級集団に加わることの安心感を促進する。自分なりの意見を言う。誰のどんな意見でも肯定的に受け止める。
		学活 45分	みんなで協力仲間を見つけよう	仲間づくり	自分と共通することをみつけた喜びを味わい、友だちに温かい声かけができるようになる。
6	修学旅行	国語 30分	上手な断り方	仲間づくり	ロールプレイを通し、相手から誘われた時にしっかりと自分の意見を述べ、上手に断ることができるようにする。
7	宿泊体験学習 夏休み	特活 45分	ありがとうをあなただに	仲間づくり	行事の中でかかわった友達に感謝の言葉をカードに書き渡す。もらったカードを台紙に貼ることで自己効力感・自尊感情を高める。
9	早期人間関係回復 ふれあい遠足	学活 45分	あなたの悩みに お答えします	仲間づくり	仲間の気持ちに共感し、温かい言葉がけをすることを通して人間関係を促進し、友だちのよさに気付く。
		保健 45分	こころも発達するのかな	仲間づくり	相手の状況を想像したり思いやりたりすることができるような体験を通して、自分が成長していくことを感じ取る。
10	終業式 始業式	総合 20分	あなたのいいところは！	自分づくり	友達のよいところを見つけてシートの項目に○を付けていく。最後に自分のところに戻ってきたカードを見て、自他のよさを知る。
11	体育大会 総合発表会 不審者対応訓練	道徳 45分	怒りの気持ちを どう乗りきる	集団づくり	心の状態や動きを客観的に見つけ、情動に対応する方法を知る。仲間との関わり合いや、日常のトラブルの解決策を考える。
		体育 20分	円陣手つなぎ風船ラリー	集団づくり	活動を共に行う中で、互いを認め合い、受容する雰囲気をつくる。
12	東京見学・ 冬休み	総合 90分	小中交流体験事業	仲間づくり	安心して中学校に入学できるよう、さわやかな出会いを経験する。小学校6年生と中学1年生との交流をなごやかに行う。
		朝の会 10分	堪忍袋	自分づくり	自分なりの見方や考え方を見失わないように感情をコントロールできる。ストレスを冷静に受け止める方法を知る。
1	早期人間関係回復	道徳 45分	あなたならどうする？ (フェンメール・不祥の種)	集団づくり	チェーンメールや不幸の手紙を受け取ったときの対処の仕方について、みんなで考える。
2	クラブ発表会	家庭 45分	知ってもらおう！ 家庭科学習	仲間づくり	4年生とのお茶会で、家庭科学習の楽しさを作品や写真などを使ってはっきりと伝えることで、自己効力感を高める。
3	卒業式 六年を送る会 修了式	学活・総合 25～50分	未来予想図	自分づくり	新しい1年間の生活に目標をみつけ、希望をもつてのぞむ。自分の成長を確認し、自己肯定感を高める。

横浜プログラム年間計画例（小学校個別支援学級）

教師の意図

学級の中での自分の役割を意識して友達とかかわり、自尊感情・自己効力感を育てたい。
人とすずんでかかわり、思いやりをもって活動できる学級集団にしたい。

月	主な行事等	時間	タイトル	関連する力	ね ら い
通年		朝の会 3分	みんな元気健康観察	仲間づくり	朝の健康観察で、友達から名前を呼ばれ自分の元気を伝える活動。友達の様子を知ることによって人への関心を高める。
		朝の会 5分	今日の気分は	自分づくり	自分の気分を表す表情カードを選びその理由をスピーチする。自己理解を進めるために感情を表す言葉を増やす経験をする。
		帰りの会 5～10分	「いいところ」を ぜひいっしょにしよう!	仲間づくり	友達の良いところを発表すると玉がびんにたまっていく。互いのよさを伝えあい自己肯定感を育てる。
4	始業式 一年を迎える会	集会 10分	なかよしあそび	仲間づくり	大勢の友達に進んで声をかけ、握手ゲームを楽しむことにより友達とふれ合う喜びや温かさを感じる。
		生活単元 45分	何のものをまね? (ジェスチャーゲーム)	仲間づくり	ジェスチャーゲームをして、相手に正しく伝えたり、相手の伝えたいことをくみ取ろうとする
		縦割り 15分	名刺交換よろしくね	仲間づくり	自己紹介のための名刺カードを作り、名刺交換ゲームをすることで多くの人と関わるきっかけをつくる。
5	運動会	生活単元 45分	みんないっしょに	仲間づくり	合い言葉によって目標を意識させて、目当てやルールを守りながら友だちと一緒に遊ぶ体験をする。
		朝の会 5分	手拍子チームワーク	集団づくり	学級全員でリズムを合わせた手拍子をすることにより、学級のみんなで心をつなげる楽しさを体験する
6		生活単元 45分	知らない人に出会ったら	自分づくり	知らない人から声をかけられたロールプレイングを通して、危険回避能力を身につける。
7	体験学習 夏休み	生活単元 20分	友達をみつけよう	仲間づくり	友達の特徴を注意して聞き、誰のことかあてるゲームを行う中で、聞く力を養う。
9	早期人間関係回復 ふれあい遠足	生活単元 45分	ふわふわ言葉と ちくちく言葉	仲間づくり	気持ちが温かくなったり辛くなったりした言葉を出し合い、その感情に気づき、温かい言葉を使う気持ちを育てる。
10	前期終業式 後期始業式	体育 15分	輪くぐりルー	仲間づくり	手を放さないようにして輪くぐりをする中で、協力することのよさやメンバーの一体感を感じる。
		国語 45分	友達カルタ	自分づくり	友達のよいところ、自分のよいところのカルタを作りゲームをする。互いの良さを認め合う雰囲気を作る。
11	宿泊体験学習	音楽 15分	リズム&名前 つないでひとつの輪	仲間づくり	リズム打ち（2拍子・3拍子・4拍子）の後につなぎたい人の名前を呼び、全員につなげるゲーム。仲間意識を高める。
12	冬休み	生活単元 45分	「ごめん」の一言	集団づくり	謝る必要のある場面のロールプレイを通して、自分が悪かったときに謝ることの大切さを感じる。
1	早期人間関係回復 不審者対応訓練	体育 15分	まねっこ行進	仲間づくり	先頭になった子の動きに合わせてメンバーが同じ動きをまねしながら行進する。仲間意識を高める。
		生活単元 45分	フルーツポンチを つくろう	集団づくり	自分が好きな果物とその理由を説明し、フルーツポンチに入れる果物をグループで話し合っ発表する。
2	合同学習発表会	体育 20分	つながったね みんなの心	集団づくり	長縄とびを楽しく長く続けるために必要な言葉かけや態度を話し合い、記録更新に役立てる。
3	卒業式 修了式 六年生を送る会	生活単元 15分	ぎゅっと団結	仲間づくり	全員が1枚の新聞紙の上に協力して乗り、成功体験を得ることで、仲間への信頼感を強める。
		生活単元 45分	ありがとうを あなたに	自分づくり	1年間の生活の中にかかわった友達に感謝の言葉をカードに書き、渡す。もらったカードを台紙に貼り、自己効力感・自尊感情を高める。

横浜プログラム年間計画例（中学校）

学級の実態
教師の意図

ルールは守るが、友だちとの関わりが希薄でクラスへの所属感が低い。相手の立場になって物事を考えることが苦手である。課題解決よりも失敗や非難を怖れ、自分を出すことをためらう生徒が多い。自分なりの考え方・感じ方を大事にしなが、相手との交流を深めていくことができるようにしたい。

月	主な行事等	時間	タイトル	関連する力	ねらい
通年		朝学活 5分	勇気づけタイム	自分づくり	相手の良いところや、自分がしてもらってうれしかったところを朝の会で話し、伝える力を身につける。
		各教科 20分	正解は誰だ！	仲間づくり	相手とのコミュニケーションを楽しむ。上手に質問する。質問に対して、はっきり答える。
4	始業式・入学式・対面式・生徒会ガイダンス 部活動ガイダンス	学活 25分	未来予想図	自分づくり	新しい1年間の生活に目標を見つけ、希望をもって臨む。自分の成長を確認し、自己肯定感を高める。
		総合 50分	自分をパワーアップ！ やればできる	自分づくり	悩んでいることについて、やるべきことを明確にし、自己選択をする行動目録法を経験し、自信をもつ。
		学活 20分	自己紹介すごろく	仲間づくり	双六をしながら、自分を理解してもらい伝え方、人の話を聞く態度を養い、集団の中での自己表現の練習をする。
5	体育祭 自然教室	道徳 50分	なんて言うかな？	自分づくり	問題場面での答えを友だちと話し合うことを通して、トラブルの解決策を考えたり謝り方を身につける。
		総合 15分	クラス全員リレー	集団づくり	クラス対抗全員リレーを行い、協力や団結をすることを通して、それぞれがクラスの主役であることを実感する。
6	中間テスト 修学旅行	総合 50分	自助・共助の精神 (安心・安全地域づくりのために)	自分づくり	犯罪被害防止について、個人でできることや住民の協力が必要なことを書き出し、話し合う。
		社会 50分	あなたはどちら？	仲間づくり	小集団の中で質問カードに対して予想を述べ合うことで、様々な人の考えの違いに気づく。
7	三者面談 総合体育大会 夏休み	道徳 50分	ホームレス(屋外生活者) について考えよう	自分づくり 仲間づくり	ホームレスに対する自分自身の認識の仕方を見直し、課題意識をもつ。
		国語 50分	あなたならどうする？ (チェーンメール)	自分づくり 集団づくり	コミュニケーションには相手があること、自分の思いだけを一方的に発信することの危険性を感じ取る。
		集会 10分	堪忍袋	自分づくり	自分の見方や感じ方を失わないで感情をコントロールしたり、ストレスを冷静に受け止めたりできるようにする。
9	防災訓練 教育相談 期末テスト	国語 50分	小中学生に ケータイは必要か？	仲間づくり	ディベートを通して、相手の意見を聞いたり、質問したりしながら、ケータイにたいする自分の意見(ケータイ・ポリシー)をもてるようにする。
		総合 50分	発見ビンゴ	自分づくり 仲間づくり	自分の嫌なところが友達から見るといいことになるゲームを通して、多様な見方や自己認識の違いを知る。
10	合唱コンクール 中間テスト	特活 15分	合唱エール交換	集団づくり	他のクラスと合唱を発表をしようことで、他のクラスへの思いやりと自分のクラスへの所属感を体験する。
		総合 50分	チャレンジタイム	仲間づくり	中学生が小学校を訪れクラブ活動を共に行う。中学生は自己有用感、小学生は中学生と関わる喜びを感じる。
12	職業講話 三者面談	保健 50分	イライラや不安・ 悩み解消法をみつけよう	集団づくり	不安やいらいらの解消法を出し合うことで、自分に合った解消法を見つけ、実践しようとする。
1	職業体験 百人一首大会	進路 50分	物語を作ろう	自分づくり	物語づくりを通して、自分の内面を知り、過去や将来に目を向ける。
2	期末テスト 卒業遠足	学活 50分	あなたのなやみに お答えします！	仲間づくり	仲間の気持ちに共感し、あたたかい言葉がけをすることを通して人間関係を促進し、また友だちのよさに気づく。
3	3年生を送る会・ 卒業式・修了式	道徳 50分	たくさんの葉	自分づくり	お世話になった人との関わりをふり振り返り、自分が多くの人との関わりによって生きている事を意識する。

横浜プログラム年間計画例（中学校個別支援級）

教師の意図		自己理解を深めながら、学級内の縦の関係や協力することの大切さ、相手と適切なコミュニケーションが取れることを目標にした			
月	主な行事等	時間	タイトル	関連する力	ねらい
通年		国語 10分	今日のテーマは何だろな？	集団づくり	話し手はテーマに沿って相手にはっきり伝える力を身につける。聞き手は聞いている話をまとめる練習をする。
		自立活動 50分	物語を作ろう	自分づくり	絵を見て、主述関係など文法を意識して物語を作成する。
4	始業式	学活 20分	モーモーリング	集団づくり	新しい仲間を迎える際に、クラス全員で協力するゲームを通して、先輩・後輩が協力してクラスを作っていくことを意識させる。
		自立活動 20分	自己紹介すごろく	自分づくり	自分のことを相手に分かるように伝えるには、どのように伝えたらよいか学習する。
5	体育祭	学活 5分	手拍子チームワーク	集団づくり	新しいクラスになってひと月、協力を必要とするプログラムを行うことで、相手を意識して活動することの大切さを学習する。
		道徳 50分	犯罪から自分の身を守ろう	自分づくり	登下校や日常生活を通して起こりうる危険を認識し、そのような状況に置かれたときの具体的対応を知る。
6	修学旅行	数学 50分	ポイントゲットだぜ！	集団づくり	班が高得点と取るために、課題を解きながら、お互いに教え教えられる経験をする。
		学活 5分	わたしはだれでしょう	仲間づくり	クイズを出したり答えたりすることを通して、学級の仲間どうしの相互理解を深める。友だちをより深く知り合うことを通して、気持ちの通じ合う関係づくりを行う。
7	夏休み	学活 50分	正解は誰だ！	仲間づくり	宿泊学習の事前学習をゲーム形式で行うことで、行事に対する意識付けを高める。
9	早期人間関係回復	学活 45分	何の物まね？（ジェスチャー）	集団づくり	レクリエーション活動を通して、どのように相手に伝えると分かりやすく伝わるかを学習する。
		道徳・自立活動 50分	なんて言うかな？	自分づくり	色々な人の考えを知ることで、自分がどのような行動や発言をすればよいか考える。
10	前期終業式 後期始業式	学活・道徳 50分	たくさんの葉	自分づくり	前期に、自分が色々な人と関わりを持ったこと、助けてもらったことに気づき、後期、自分がどのように行動するか考える。
11	文化祭	総合 90分	小中交流体験事業	仲間づくり	次年度入級予定の子どもが安心して入学できるよう、さわやかな出会いを経験する。新たな出会いの中で交流をなごやかに行う。
		道徳・自立活動 50分	ごめんね	集団づくり	自分に非があるときにきちんと謝ること、相手の気持ちを意識した謝り方を身につける。
12	冬休み	体育 50分	こころをひとつに合わせて～スポーツパルーン～	集団づくり	共に行うという活動を大切にすることで、互いを認め合い、受容する雰囲気をつくる。
		自立活動 50分	上手な断り方	仲間づくり	相手の気持ちを尊重しつつ自分の意見を伝えられるようにする。
1	早期人間関係回復	道徳・自立活動 50分	怒りの気持ちをどう乗りきる	集団づくり	心の状態や動きを客観的に見つけ、情動に対応する方法を知る。仲間との関わりあいや、日常のトラブルの解決策を考える。
2	学習発表会	道徳・自立活動 50分	いろいろな情動をどう乗りきる	自分づくり	いろいろな情動に対し、上手につきあう方法を考える。
3	卒業式・修了式	学活・道徳 50分	たくさんの葉	自分づくり	1年を振り返って、自分が色々な人との関係の中で成長したことに気づき、友達や先生への感謝の気持ちをまとめる。
		学活・総合 50分	未来予想図	自分づくり	新しい1年間の生活に目標をみつけ、希望をもってのぞむ。自分の成長を確認し、自己肯定感を高める。

(4)の例 教科等の授業に横浜プログラムを活用し、教育課程の中に位置づける

- ・単元の特徴を生かし、必要な社会的スキルの育成を授業の中に組み入れ、単元（授業）をデザインします。
- ・「横浜プログラムの基本的な進め方」を取り入れ、教科等の目標達成とともに、社会的スキルの育成を図ります。

本時展開例（ 小学校6年 社会科「大昔の人々の暮らしと国づくり」より ）

本時目標と本時展開

狩猟採集の生活をしてきたころの人々の暮らしの想像図から分かることについて話し合うことを通して、当時の人々の生活の工夫や苦勞に気づくことができる

本時で高めたい社会的スキル

《自分づくり》 ①自分の意見をもつ ④自他の違いを認める

<p>学習活動 ・予想される子どもの反応</p>	<p>高めたい スキル</p>	<p>・指導上の留意点（資）資料 【評】評価規準 （ス）社会的スキルを高めるための支援・留意点など</p>
<p>《活動のねらいの提示》</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">大昔の人々は、どんな暮らしをしていたのだろうか？</p>		<p>活動の前に、3つの基本ルール（「暴力NO」「パスOK」「持ち出し禁止」）を確認する</p>
<p>1 狩猟採集の時代の人々の暮らしの想像図を見て、グループのなかで気づいたことを発表し合う</p>		<p>（資）狩猟採集の時代の人々の暮らしの想像図と道具の写真（教科書〇ページ）を示して、この時間の「ねらい」「流れ」「約束」の説明をする。</p>
<p>《活動の流れの説明》</p> <p>①話す順番は、リーダーからスタートで時計回り</p> <p>②大昔の人々の暮らしの絵を見て「すごい」と思ったことや「大変」と思ったことや「意外」に思ったことや「疑問」に思ったことを付箋に書く（3分）</p> <p>③付箋に書いたことをグループの人に発表して、付箋を画用紙に貼る（貼る場所はどこでもいい）（7分）</p> <p>……ここまでは「ナイス！ アイディア！」と同じ……</p> <p>④付箋を仲間分けして、大昔の人々がどんな暮らしをしていたのか、グループで文にまとめて発表する。（まとめ方は後で言います）</p>		<p>（ス）横浜プログラムの「ナイス！ アイディア！」と同じ方法で発表し合うことを伝え、活動に見通しを持たせるが、グループのまとめの方法が違うので、後で説明することを伝える</p> <p>（ス）活動の流れが分かりやすいように掲示しながら説明する。</p>
<p>《約束の説明》</p> <p>→話している人が、話しやすいようにだまって聞く</p> <p>→なるべくたくさん意見を出す</p> <p>→思いつかないときは「パス」という</p> <p>→どんな意見もOKだけど、「すごい」「大変」「意外」「疑問」と思ったわけを必ず言う</p> <p>→同じ意見もOK。その時は、「〇〇さんと同じで…」「〇〇さんと似た意見で…」と言いながら発表する。</p>		<p>（ス）「ナイス！ アイディア！」と同じ約束であることを確認する。ただし、社会科の学習なので、「わけ」を言う約束であることを確認する。</p>
<p>（例）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 貝をとって料理している </div> <p>×貝をとって料理しました。</p> <p>○貝をとってナベみたいな物に入れて煮ています。大昔の人も料理を作ってたというのがすごいと思いました。</p>		

<p>・お店とかないのに、服を着ている。自分たちで服を作るなんてすごい。服の材料は何なのか疑問。</p> <p>・女の人がネックレスや髪飾りをしている。大昔の人もおしゃれを楽しんでいたというのが意外。</p> <p>・貝とか魚とか木の実とか鹿とか、食べ物を自分達で取って食べているのが大変そう。</p> <p>・今使っているのと同じ形の釣り針で釣りをしている。釣り針を石で作っている。自分で石で作るなんてすごい。</p> <p>・家が藁葺きの屋根みたいなのだけなんだけど、中はどうなっているのか疑問。</p> <p>・今と同じようなカゴみたいなものを使っている。自分たちで道具を作っているのがすごい。</p> <p>・冷蔵庫とかお店とかないのだから、食べ物がとれないときは大変。</p> <p>2 グループで、大昔の人々がどんな暮らしをしていたのかまとめて、発表する。</p>	<p>自分づくり</p> <p>①自分の意見をもつ</p> <p>④自他の違いを認める</p>	<p>(ス) グループ内での発表の際、約束の通りにどんな意見でもだまって聞くということができていないか見て、必要があれば助言する。また、意見を言うのが苦手な子の発表を支援する。</p> <p>【評】関 狩猟採集をしていたころの人々の暮らしについて、意欲的に考えている。</p>
<p>《まとめ方の説明》</p> <p>大昔の人々がどんな暮らしをしていたかまとめるために、みんなの出した付箋を、仲間分けして貼り直し、丸でかこんで題名をつけてください。例えば、「どんなものを食べていたか」というような題名です。</p> <p>仲間分けができたなら、大昔の人々の暮らしを文にまとめてください。それを発表します。例えば「大昔の人々は、〇〇のような家に住んでいて、……」というような文です。 (15分)</p>		<p>・各グループの発表をもとに、狩猟採集生活の工夫や苦労をまとめる。</p> <p>【評】思 狩猟採集をしていたころの人々の暮らしについて自分の言葉でまとめている。</p>
<p>・大昔の人は、わらぶき屋根だけみたいな低い家に住んでいて、自分たちで作った石の道具を使って、鹿とか魚とかをつかまえたり、貝や木の実を集めたりして食べていた。</p> <p>3 次時の見通しをもつ</p>		<p>・疑問の中に食料不足になったらどうするのかという内容があれば、その疑問をもとに次時につなげる。なければ、教師が、食料確保の不安定さを示し、食料不足の時にはどうしていたのか予想させ、次時の学習につなげる。</p>

「横浜プログラムの基本的な進め方」を取り入れ「高めたいスキル」を位置づけることにより、教科等の授業を通して「社会的スキル」を高める

この例では、「狩猟採集生活をしてきたころの人々の暮らしの想像図」という一枚の資料を読み取るという学習活動の特色を生かし、横浜プログラムを活用しています。「共通の資料から分かったことをまとめていく」というこの時間の学習活動の特色を生かし、「個」→「グループ」→「全体」と展開する「横浜プログラムの基本的な進め方」を取り入れているのです。まず一人で資料を読み取り、それをグループで交流し合い、まとめを全体に発表するという授業展開です。同時に、グループでの意見交流の際に、「ナイス！ アイディア」というプログラムのブレインストーミングの手法を取り入れ、「①自分の意見をもつ」「④自他の違いを認める」というスキルを高めるよう意図しています。

このように、教科等の授業の中に、横浜プログラムを取り入れていくことがさまざまな場面で可能です。そうすることで、学力をつける教科等の授業を通して社会的スキルも高めていくことができ、誰もが安心できる温かな学級風土を醸成することが可能になります。また、この方法により、教育課程に横浜プログラムを位置づける機会が大きく広がり、次のページに紹介するように学年ごよみの中に横浜プログラムを取り入れることも可能になります。

横浜プログラムの活用を取り入れた学年ごよみの例

ゴシック文字斜体下線の単元が横浜プログラムの活用を取り入れたもの

子どもの社会的スキル横浜プログラムの活用を取り入れた学年ごよみ（小学校6年）（例）

月	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月
主な行事など	始業式 1年生を迎える会	運動会	修学旅行		早期人間関係回復 ふれあい遠足(たてわり)	終業式 始業式 たてわり地域清掃
国語	<u>ステップアップスピーチ</u> <u>ミニ漢字テスト</u> ・せんねんまんねん ・ <u>ナイスアイデア</u> ・ <u>サイコロトーク</u> ・ <u>カレーライス</u> ・漢字の広場 ・春は、あたたか	・生き物はつながりの中に ・ <u>学級討論会</u> <u>ぞしよ</u> ・伝えにくいことを伝える	ようこそ、わたしたちの町へ ・漢字の広場 ・ <u>上手な断り方</u>	・狂言 柿山伏 ・漢字の形と音・意味 ・河鹿の屏風 ・夏は、暑し	・たのしみは ・漢字の広場 ・ <u>平和について考える</u>	・熟語の成り立ち ・生活の中の敬語 ・やまなし
社会	<u>狩りや採集の時代から米作りの時代へ</u>	強まる天皇の力と貴族の文化	<u>武士の政治と鎌倉幕府</u>	<u>今ものこる室町文化</u>	<u>天下統一から太平の世の中へ</u>	<u>黒船がやってき～新しい日本の姿見つめよう～</u>
算数	1 <u>円の面積</u> 2 文字と式	3 <u>分数のかけ算</u>	4 <u>分数のわり算</u> 5 対称な形	6 比と比の値	7 拡大図と縮図 8 速さ	9 角柱と円柱の面積 10 <u>およその面積</u>
理科	わたしたちをとりまくかんきょう 1 <u>ものの燃え方と空気</u>	2 体のつくりとはたらき	3 植物の成長と日光や水とのかわり	4 生物とそのかんきょう	5 月と太陽	6 土地のつち変化
総合	見つめよう私たちのまち				私たちのまちの歴史を	
家庭科	くふうしよう朝の生活	きれいにしようクリーン大作戦	暑い季節を快適に	くふうしよう、暑		
音楽	<u>リコーダーリレー</u>	音の重なりとひびき	<u>演奏のみりよく</u>	物語と音楽		
図工	見つけたよ私の町のこの景色	切ったねん土の切り口から	見方はいろいろ 芸術家の心に触れて	動き出したストーリー	伸ばして固めた白い世界	
体育	<u>体づくり運動</u> 新体力テスト	<u>リレー表現(ソーラン節)</u>	<u>マット運動</u> 水泳	陸上(走り幅跳び) 保健(喫煙・薬物・飲酒の害と健康)	<u>ボール運動(ベースボール)</u> 体育大会に向けて	
外国語	<u>英語活動</u>	英語活動	英語活動	国際理解教室	<u>英語活動</u>	国際理解教室
道徳	・より高い目標に向かって ・明るく生きる ・家族の一員として	・役割と責任の自覚 ・見えない規律 ・郷土を愛する	・公平な態度 ・ <u>いじめをなくそう</u> ・謙虚な心	・かけがいのない自分 ・新しいものを生み出す	・身の回りの整理整頓 ・男女の友情と協力 ・感謝する心	・親友 ・日本人として ・自然を愛する ・正義の意味を考える
学活	・学級目標を決めよう ・係を決めよう ・当番活動のやり方を考えよう ・委員会・クラブの所属を決めよう ・最高学年として	<u>運動会をパワーアップ</u> ・学級の年間活動計画を決めよう ・学校のきまきまを見直そう	・修学旅行のめあてや約束 ・修学旅行の係やグループ決め ・ふれあい遠足の計画をたてよう	<u>名刺交換よろしくね(たてわり)</u> ・掃除の仕方を見直そう ・ネチケットについて学ぼう ・ <u>ありがとうをあなたに</u>	・学校保健委員会のクラスの取組 ・雨の日の遊びを工夫しよう ・見直そう、毎日	<u>あなたのいいところは！(成長の振り返り)</u> ・前期の振り返りをしよう ・係活動を見直そう ・たてわり地域清掃の計画

7 Y-Pアセスメントとは

(1) Y-Pアセスメントの構成

横浜プログラムには、子ども達の社会的スキルの育成状況を把握し、日常の児童生徒指導の工夫・改善に役立てるために、「Y-Pアセスメントシート」が用意されています。Y-Pアセスメントシートは、学級や子どもについて課題を把握し、その支援策を探る「支援検討会」の基礎資料となります。Y-Pアセスメントシートは、次の2つで構成されます。

- ①複数の教師で行う「学級風土チェックシート」
- ②子どもが自分自身について回答する
「学校生活についてのアンケート」

(2) Y-Pアセスメントの「支援検討会」の目的

Y-Pアセスメントは「支援検討会」を大事にします。支援検討会には2つの目的があります。

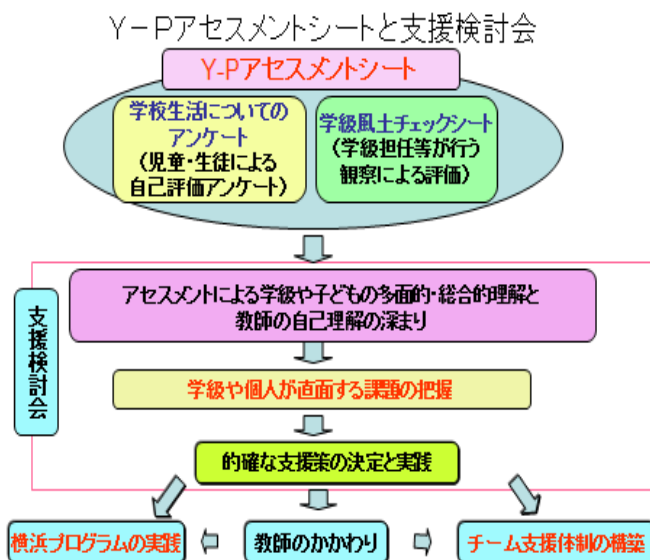
- ① 子ども達の社会的スキルの育成状況をつかみ、年齢相応の社会的スキルを身につけるための支援の方法を見出すこと。
- ② 複数の視点から子どもを見る経験を通して、教師の確かな主観（貴重な感覚）を鍛えるとともに、チームとしての課題解決能力を高め、教師集団としての成長を支えること。

第一の目的は、子ども達に不足している社会的スキルを見出すことです。そして、それを補うためのプログラムの実践や、プログラム実践以外の意図的・積極的なかかわり方を検討し、子ども達に年齢相応の社会的スキルを身につけさせていくことです。

第二の目的は、複数の教師が互いに学級や子どもへの見方を聞きあうことにより、教師に新たな気づきをもたらすことです。経験の浅い教師は、ベテランの教師の子どもの見方を聞くことによって、自分と異なる子ども理解の方法があることを知ることとなるでしょう。また、ベテランの教師は、自身の子ども「見え方」へのこだわりや偏りに気づくかもしれません。

そして、支援検討会での支援策の決定は、教師一人ひとりが、チームの一員としてその子の課題に対して同じ方向性でかかわることを意味しています。つまり、支援検討会は、チーム支援のスタート、もしくはステップアップの意味も伴っているのです。

一教師として真摯に語り合い、教師としての新たな自分を再構成していくこと、教師集団としてのチーム力の向上が図られること、言いか



※「Y-Pアセスメントシート」は、横浜プログラムの実践を通して検証中であり、各学校でよりよく活用できるようにメンテナンスを行っています。アセスメントシート本体の最新版は横浜市教育委員会のホームページからダウンロードしてください。最新版には、学年男女の尺度値分布による段階区分と、小学校低学年用も用意されています。

http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/plan_hoshin/skill.html

そして、それはとりもなおさず、それぞれの教師の子どもへのかかわり方の違いを浮き彫りにしてくれそうです。

教師は、それぞれが「理想とする学級像・子ども像」をもっています。何を評価の対象としているか、また、何を基準としているか、そのズレを話し合うことによって、それぞれの教師が培ってきた学級集団や子どもへの<枠組み>が明らかになっていきます。教師が自らの枠組みを問い直すことは、子どもや学級への新たなかかわりの方法を見出すことにつながります。

※ 文部科学省の特別活動の望ましい集団づくりの視点は、目標達成機能(performance function, P 機能)と集団維持機能(maintenance function, M 機能)からリーダーシップを捉えて、類型化した PM 理論 (PM theory of leadership 三隅二不二, 1966, 1984) に基づいています。横浜プログラムでは、これに、3つのアプローチの視点から、「集団づくり」として合意形成機能 (consensus function)、「仲間づくり」として共感性機能(empathy function)、「自分づくり」として寛容機能(tolerance function)、「公正機能」(justice function)を加え、6項目から集団の育成状況をアセスメントすることにしました。

(5) 学校生活に関するアンケート

横浜プログラムでは、個人の社会的スキルの育成状況を、「自分づくり」と「仲間づくり」の2側面のバランスを考慮に入れてアセスメントすることとしました。前述の「学級風土チェックシート」を実施する時期にあわせて、子ども達に、「学校生活に関するアンケート」調査を実施します。

アンケートは、「自分自身に関すること (A 項目 10 問)」「自分の学校生活に関すること (B 項目 12 問)」「学級での居心地感に関すること (C 項目 4 問)」の合計 26 問に、子ども達が5件法で自己評価する形式をとっています。「学校生活に関するアンケート」のデータを「Y-P アセスメント」ファイルに入力すると学級分布図が表示されます。縦軸には、「自分づくりスキル」として、自己効力感・自尊感情の合計が、横軸には「仲間づくりスキル」

「集団づくりスキル」として、自己表現 (含むかかわり) と共感配慮の合計がスケールになっています。この分布図を、「社会的スキルの育成状況モデル」に照らしてアセスメントのデータとしていきます。(小学校1,2年用は、A項目8問、B項目12問、C項目4問の合計24問です。)

①「自分づくり」「仲間づくり・集団づくり」ともに高い値を示す「高自己評価群」、②「自分づくり」が高い値を示し、「仲間づくり・集団づくり」の値が低い「マイペース群」、③「自分づくり」が低い値を示し、「仲間づくり・集団づくり」の値が高い「対人過敏群」、④「自分づくり」「仲間づくり・集団づくり」の値が共に低い「低自己評価群」と4群に分けられます。「マイペース群」が“Big I, Small We”のグループであり、「対人過敏群」が“Small I, Big We”と位置付けられます。

また、子ども一人ひとりには、自動的にプロフィール表が作成されます。

がっこうせいけいかつ
学校生活についてのアンケート

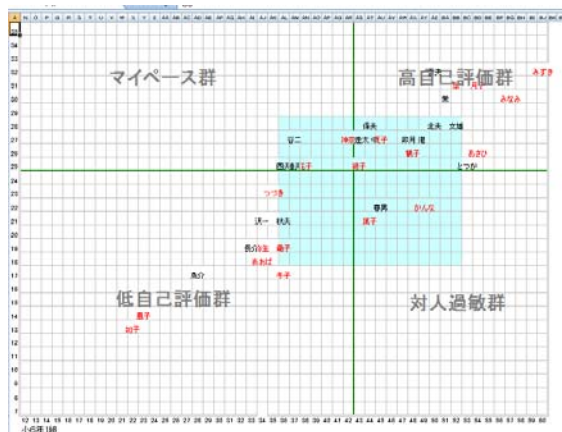
しょうがくせい わんせい ちゅうがくせい ちゅうがくせい
小学校3年生～中学校3年生用

学校生活に関するアンケート

	1 全然 思わない	2 そう 思わない	3 どちら とも いえない	4 そう 思う	5 とても 思う
① わたしは、自分で決めたことは、うまくいかないことがあっても、最後までがんばります。	1	2	3	4	5
② わたしは、友だちやクラスの人の役に立っています。	1	2	3	4	5
③ わたしは、何かをするとき、うまくいかないのではないかと心配することが多いです。	1	2	3	4	5
④ わたしは、自分のことを大切な人だと思っています。	1	2	3	4	5
⑤ わたしは、自分のことが好きです。	1	2	3	4	5
⑥ わたしは、いやなことに挑戦しないで、逃げだしてしまうことがよくあります。	1	2	3	4	5
⑦ わたしには、いろいろな良いところがあります。	1	2	3	4	5
⑧ わたしがんばって勉強すれば、わたしの成績は、良くなります。	1	2	3	4	5
⑨ わたしは、友だちの言いなりになってしまうことがあります。	1	2	3	4	5
⑩ わたしは、楽しそうなことでも、とにかくやってみます。	1	2	3	4	5
⑪ わたしは、クラスの友だちと一緒にいると楽しいです。	1	2	3	4	5
⑫ わたしは、クラスの友だちに大切にされています。	1	2	3	4	5
⑬ わたしは、今のクラスが気に入っています。	1	2	3	4	5
⑭ わたしは、このクラスになって良かったと思っています。	1	2	3	4	5

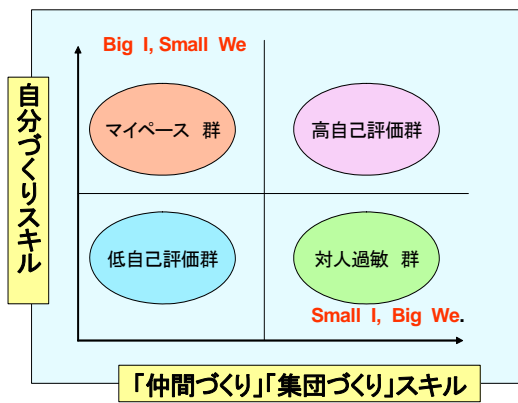
次のページに進んでください。

＜学級分布図＞



「自分自身に関する」と「A項目(10)

社会的スキルの育成モデル



「学校でのあなたの様子」に関する B項目(12)

(6) Y-P 支援検討会の実施

学級風土チェックシート、学校生活に関するアンケートの学級分布図、プロフィール表等のデータをもとに、日頃から観察している子ども達の日常生活の様子を加え、子ども達の社会的スキルの育成状況を話し合い、子ども達への支援の方法を探るのが、支援検討会です。

支援検討会では、学級集団のアセスメント、子ども一人ひとりの個人アセスメントが行われ、それぞれに対する支援の方法が検討されます。支援検討会の実施は、以下の様な点に留意して進めます。

- ・ 3～10人程度で (学年会・ブロック会や指導部会) 年2～3回を年間計画に位置づけます。長時間にならないことが肝要です。
- ・ 誰もが自由に発言でき、明るいムードで受け入れられる雰囲気づくりを心がけてください。普段の努力が認められ、学級経営や授業作りに活かされることが大切です。
- ・ 教育相談的視点にたった子ども理解が促進されることが大切です。
- ・ リーダー (ファシリテーター) は学年全体を把握している教師が行います。
- ・ 問題に応じて、管理職やカウンセラー等の参加を求めるとよいでしょう。

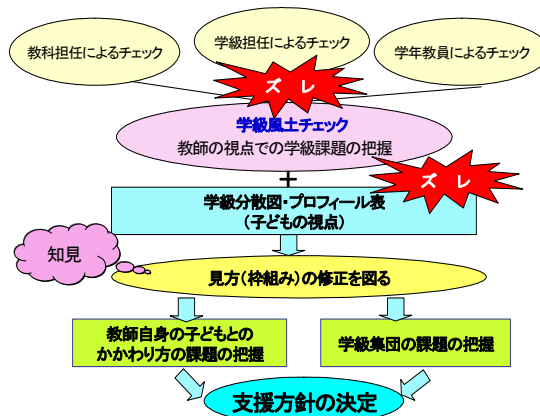
(7) 学級アセスメントの手順

学級風土チェック (まとめ) シートと学級分布図のデータを使います。

学級風土チェックシートによってチームで把握した学級課題と、学級分布図の子ども達の分布の偏りから見た学級全体の傾向によって得た課題を統合して考えていきます。双方でとらえた課題がズレている場合には、そのわけを洞察していきます。

また、学級風土チェックシートを定期的実施することで、個人や集団が抱える課題の改善に向けた個別の支援や学級集団への働きかけを検討する材料とします。

学級アセスメントの構造



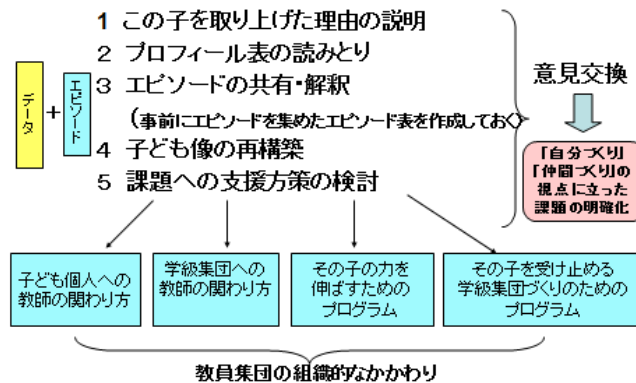
(8) 個人アセスメントの手順

個人アセスメントでは、プロフィール表のデータと学級風土チェックの個人データ、日常の観察から得られる子どものエピソードを用いて、子ども理解を進め、支援策を決定します。

実施は、子どもの豊かな社会性を育むための教育課程の運営・改善に大いに役立ちます。

(元横浜国立大学 岡田 守弘)

個人アセスメントの進め方



学校生活に関するアンケートから自動的に作成される子ども一人ひとりのプロフィール表のデータと、日頃から観察されているエピソードを関連づけて、その子どもについて話し合う中で、今まで見えていなかった子ども像が再構築されていきます。このプロセスはその子どものことを「分かる・了解する」ということであり、子どもへの教育相談的理解がなされるということでもあります。ここまですれば、子どもへの支援策は自ずと見えてきます。また、その子どもを抱えることができる学級集団づくりへのプログラムやその集団への教師のかかわり方もみえてくることでしょう。

(9) 支援検討会の果たす役割

チームによる支援検討会は教職員の総合的な指導力・対応力を向上させる効果があります。

さらに、アセスメントのプロセス全体を通して支援検討会の果たす役割は、「個人や集団の問題状況の把握」→「対応策の検討・決定」→「実践」→「評価」というP・D・C・Aのサイクルの中で、評価や計画という重要な役割をになうことになります。その意味からも定期的な支援検討会の

8 Y-P アセスメント支援検討会の意義

Y-P アセスメントの中で重要な位置を占めているのは「支援検討会」です。すでに多忙な学校に、さらに支援検討会に時間を割くことをお願いできるのかと思う時もありますが、「支援検討会」を省略した横浜プログラムは、結局その力を十分に展開できないことになると思いますので、あえてその重要性をここに述べます。

1 支援検討会とは

「支援検討会」とは、もともと医学の場で使われるケースカンファレンス (Case Conference) という言葉から、学校現場になじむように作った言葉で、最近、学校現場でもよく使われるようになりました。事例検討会とは、事例の援助過程において的確な援助を行うために、援助にかかわる者達が集まり、会議をすることです。学校教育の場で使われる時、対象は子ども、学級、教師など様々であり、その目的は以下の3つになります。

- ①児童生徒に関する多面的な理解
- ②アセスメントに基づいた具体的な援助指針の確立
- ③一定期間後の指導・援助方針に関する評価と修正

2 Y-P アセスメントにおける支援検討会の特徴

Y-P アセスメントは、子ども個人の「学校生活についてのアンケート」からできあがった学級分布図と、複数の教師の合意によって作成される「学級風土チェックシート」の2種類のデータを基盤にしています。そのため、Y-P アセスメントには以下の2つの大きな特徴があります。

- ①子ども個人の学級生活に関する感じ方を分布図から把握することができるだけでなく、教師が学級について感じていることも学級風土チェックシートを通して把握することができる。
- ②学級風土チェックシートは複数の教師が評価するため、教師個人の主観に陥ることなく、多面的に学級風土を把握することができる。

この2つの特徴のために、Y-P 支援検討会はな

くてはならない重要な場であり、学校や教師にとって以下のような恵みをもたらすものとなります。

<教師の中に生まれる気づき>

複数の教師による評価であるため、そこには当然<ズレ>が発生します。しかし、Y-P アセスメントではそのズレを<問題>としてではなく、学級を知る教師の専門性に基づいた<貴重な感覚>として捉えていきます。支援検討会では、教師間の学級に対する感覚の微妙なズレを話し合います。このプロセスを通して、それぞれの教師の中に、学級について新たな気づきを生むことができます。

<子ども理解の深まり>

複数の教師が関わっているため、子ども個人に関する見方についても教師間でズレが生じてきます。加えて、教師による子ども個人に関する見方と子ども自身によるアンケート結果とのズレも発生してきます。支援検討会では、日常的に教師が観察している子どもに関するエピソードと、Y-P アセスメントのデータとを関連付けて話し合うことを通して、その子どもに関する理解が深まりやすくなります。

<支援のための役割分担>

複数の教師が参加しているために、子どもを支援する具体的な対応が必要なとき、役割分担がしやすく、組織としての力を活用しやすくなります。

<教師個人の資質の向上>

複数の教師による話し合いであるため、各教師は自分と他の教師との見方の違いに気づきやすく、教師個人の資質の向上につながります。

これらの利点がある一方、複数の教師が同じ場にいるため、教師間の遠慮や甘えも生じやすくなります。このような事態を防ぐために支援検討会での進行役は、大変重要な役割を果たすことになります。

3 効果的な検討会とは

支援検討会は、関係者が集まって単に子どもの実態について話し合う場であったり、共通理解をするだけの場であったりしてはなりません。では、支援検討会をもう一步進めて、効果的にするためには、どのような視点が必要でしょうか。

吉田新一郎氏の「会議の技法」を参考にして整理すると、検討会がうまく進行できない問題点は次のように考えられます。

- ① 会の目的がはっきりせず、話題が広がりすぎて、収束のつかない状況に陥り、導き出せるはずの結果が失われてしまう。
- ② 目的がはっきりしないため、進め方も曖昧になり、結果的に時間が長くなる。
- ③ エピソード等の説明の時間が大半を占め、自由な話し合いの時間が不十分になる。
- ④ 発言しない人、批判に偏りがちな意見を出す人、自分の経験話に話題を転換してしまう人などがいて、自由な発言がしにくい雰囲気になる。
- ⑤ 会議の進行が形式的で柔軟性がなく、創造性を駆り立てる形態になっていない。

以上のことをふまえると、効果的な支援検討会の条件は以下のようになります。

- ① 出席者が支援検討会のねらいと討議すべき内容についてしっかりと共通認識を持っていること。
- ② 支援検討会の進め方について、あらかじめ話し合っ合意をし、できるだけ短時間のうちに進行するように心がけること。
- ③ 支援検討会が始まる前に内容を整理し、事前資料（例えば、エピソード）と支援検討会で話す資料について分けて提示するように準備しておくこと。
- ④ 安心して、誰もが発言できる雰囲気をつくり、しかも支援検討会の進行役を含めて、出席者が自分の役割を明確にして会に臨むこと
- ⑤ 進行役は、支援検討会の進行の仕方が目的に合っているかどうかを常にチェックし、場の雰囲気や参加者の様子に停滞感や窮屈さを感じたときには運営の仕方を工夫すること

限られた時間ではありますが、効果的に支援検討会を行うことで、参加者全員が豊かな恵みを得られるものと思います。また、支援検討会の終了は次のステップの始まりということを自覚することが大切でしょう。

参考文献：

吉田新一郎：会議の技法、2000年、中央公論新社

（ 東海大学 芳川 玲子 ）

子どもの社会的スキル横浜プログラム
三訂版
理論編
発行年月 平成24年 5月
監修 岡田守弘 犬塚文雄 芳川玲子
編集・発行 横浜市教育委員会事務局